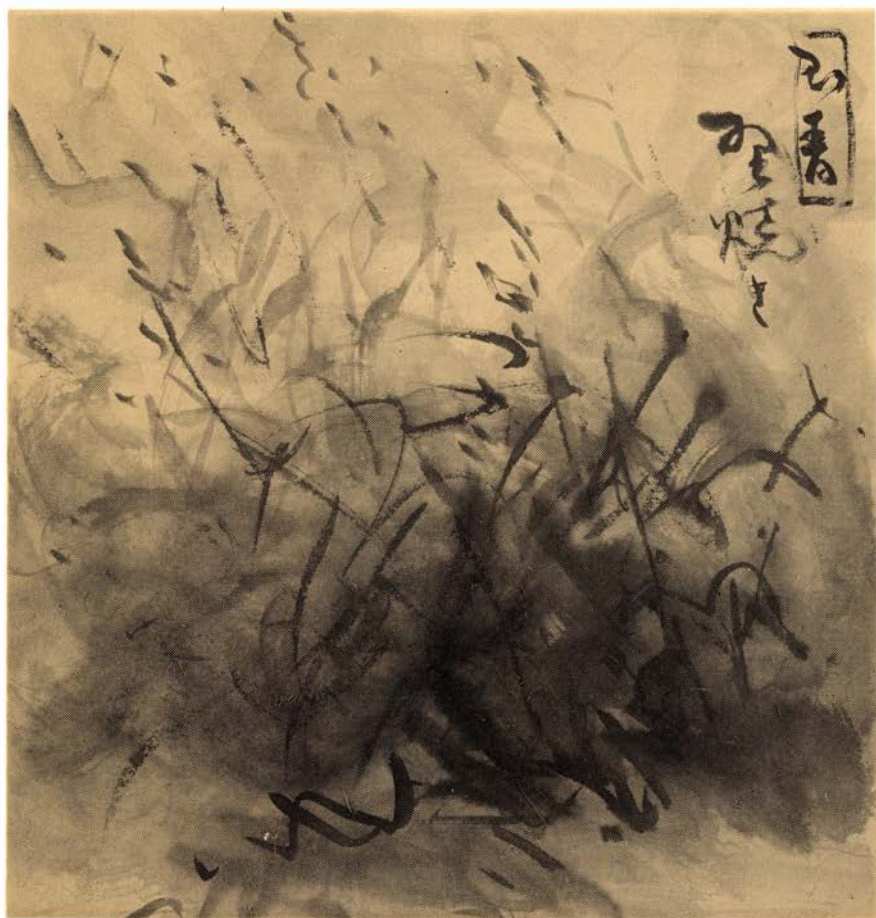


川柳塔

昭和五十七年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷六五七号



日川協加盟

No. 657

二月号

姉妹品大和錦印



柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社
大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2番

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

南紀 和歌山 四国でのお泊りは——

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉——忘れえぬ はまゆめの宿

政府登録国際観光ホテル **ホテルパシフィック**

政府登録国際観光旅館 **朝日**

勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス

政府登録国際観光旅館 **中の島**

湯峰温泉——山のいで湯で山菜料理

政府登録国際観光旅館 **湯の峯荘**

和歌山・新和歌浦——海岸美が楽しめる

政府登録国際観光旅館 **萬波**

徳島・鳴門——うずしめの宿

政府登録国際観光旅館 **鳴門**

政府登録国際観光旅館 **鳴門公園ホテル**

紀北・橋本——ゴルフの宿で季節料理

観光旅館 **紀の川苑**

大阪・泉南淡輪——魚つりに ゴルフに

観光旅館 **淡の輪苑**

大阪・なんば——清楚で近代的なホテル

ホテル南海

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所

☎06-631-0222



南海電鉄

脚 三 人 二

新幹線隣りは何をす人ぞ

エレベーターええ鼻筋のプロフィール

二字脱字よっぽどあわてた置手紙

女房の意見なるほどと思えども

今生きていたら同じ年のいとこ来る

栗 尾 西

早いもので、二月の言葉を書くことになった。如月、衣更着、生更ぎ、と色々の字をあてている。

万葉集卷一の額田王の長歌に

『冬こもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 咲かざりし 花も咲けれど 山を茂み入りても取らず 草深み 取りても見ず』というのがある。今年は二月三日が節分で、翌四日が立春で、春とは名のみの寒さがまだ続く。

一月号に出雲の同人原独仙氏のダイヤ婚をお祝いすると、今度は同じ島根県の本次町の同人堀江正朗さんと芳子さんの句集「二人三脚」刊行をおよろこび申上げることになった。二度あることは三度あるというが次は誰方の番であろう。どうかもう一度よろこばしていただきたいものだ。

句集の序文を書かれた尼緑之助さんの一文をお借りすると、

「平凡な日常の生活詩だが、不思議に共感をゆさぶるものがある。つまり小手先の作品ではなく、全身でぶっつかろうとする訴える力、その迫力がそそがせても、真実味が句の生命にスパークするのであろう」という誠に当を得た作品評である。

戦官というハンディを持った正朗さんと、病氣勝の芳子さんの愛情一とすじの身も心も文字通りの二人三脚の立派な御生活と、賢明な一女二男の温い御家庭の、身に迫る一句一句は読む者をして唯々感激に感激を重ねる許りである。また芳子さんのあとがきにはホロリとさせられる感泣がある。

是非、この一本を座右に置いて、人生の修養と句の修業に資したいと念願するものである。

今後共お二人の御健勝とご清吟を只管お祈りする次第である。

川 柳 塔 二 月 号

座右の句

ふるくとも僕には仁義禮智信

(路郎)

私の句

晩年へ一日ずつを大事にし

欄 蘭

川柳塔 二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

二人三脚

旅情の湯

川柳塔 (同人吟)

自選集

■川柳太平記(45) 新聞柳壇の初登場

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(五丁)

秀句鑑賞

水煙抄

水煙抄

57年度二賞候補作品中間発表

句評リレー (大矢十郎・高杉鬼遊・藤井明朗・本田恵二朗)

愛染帖

西尾 葉 (1)

正 本 水 客 (2)

西 尾 葉 選 (4)

東 野 大 八 (26)

黒川 紫香選 (23)

榎谷 寿馬選 (45)

正 本 水 客 選 (30)

橋高 薫風選 (50)

旅情の湯

正 本 水 客

初春のことでもあるので、一味ちがった温泉をのんびり廻ってみることにする。

大丸温泉

九尾の狐の伝説を秘めて今も噴煙を上げている那須火山の山峡に大丸温泉がある。宿の中庭を流れる幅6米ほどの白戸川をせき止めて、川全体が露天風呂になっている川の湯である。少しぬらつく川石を踏みしめて中に這入ると、川上は小さな滝になっていて、その下辺りから湯が湧き出しているらしい。川なかの岩に頭をもたせて思いきり手足を伸ばすと体ぜんたいが流れに溶けてゆくようで、背後に那須岳が間近く迫っている。

甲子(カシ)温泉

昔、松平氏の城下町として栄えた白河から阿武隈川の清流に沿ってバナの林を分けて行くことバスで40分、新甲子温泉に着く。そこから更に原生林のなかを遡ること4キロに甲子温泉の一軒宿がある。文字通り深山幽谷のムードを持っている。浴室は宿から一〇〇段ほどの石段を下った川の対岸で、高い天井の下に凡そ五十畳はある一枚の大岩盤の下からコンコンと湯があふれている。42度無色無臭

柳友の誼み

■堀江正朗・芳子句集「二人三脚」を読んで

川柳に生き抜いた足跡

句集「二人三脚」の感動

句集「二人三脚」私見

「いのち」

一路集「無口」

「赤」

初歩教室

柳界展望

本社新年句会

一分間の柳論

各地柳壇へ佳句地10選・里 小路選

編集後記

鈴木村諷子…(44)

尼 緑之助…(53)

東野 大八…(54)

児島与呂志…(55)

鈴木村諷子選…(56)

藤田頂留子選…(56)

杉浦婦美子選…(57)

本田恵二朗…(58)

加藤 貞山…(65)

加藤 貞山…(65)

加藤 貞山…(65)

加藤 貞山…(65)

加藤 貞山…(65)

薫風・酔々・鬼遊・史好…(73)

座右の句

人恋し人煩し波の音

私の句

振向けばお伽噺の二つ三つ

(栞)

浦野 和子

のカルシウム泉で立つても深さは胸元まである。川の流れを消すほどに野鳥の声が降ってくる。何ともこきげんな山の湯である。

濁河(ニゴリゴ)温泉

高山線を飛騨小坂で捨てて、バスに揺られて登りに登ること二時間、木曽御岳山の西腹六合目に濁河温泉がある。夕食の山菜鍋がめずらしかった。温泉は豊富な湯量であるが外の野天風呂へ行くのが一仕事である。湯谷の溪谷に向って段々と曲り曲って下りること暫し、漸く水面の見える辺りに二坪ほどの岩のくぼみがあって、そこに少し濁ったような湯がたたえられている。上も下も一枚岩の断崖に宙吊りになっているようで何とも爽快な気分である。木の葉がハラハラハラと散り込んでくる。御岳が有史以来初めて噴火を起こしたのは翌早朝のことであった。

垂玉(タルタマ)温泉

九州高森線の阿蘇下田からバス30分、阿蘇五岳の一つ烏帽子岳の中腹にある垂玉温泉は喧噪とは全く無縁の宿である。一軒宿ではあるが、谷へ向って廊下が延びていて可成り大きな建物である。温泉は道路を隔てた向い側の素朴な別棟になっていて、正面に大きな湯滝が夜通し変ることなくドウドウと音を立てている。ゆるい下駄を鳴らしてゆくと、少し離れた小さな滝の下に天然の露天風呂が湯気を立てている。下は湯苔でヌルヌルして湯は温めだが、外輪山を真近に望んで俗塵が消えてゆくようである。



西尾 栞選

松原市 谷垣史好

ロボットも少しけだるい月曜日
麦めしにするか陛下も食べてはる
小食の家族と八百屋知っている
企みがあり後ろ手に戸を締める
いい本に出会い酩酊二、三日

大阪駅前の旭屋書店消える

立読みへ何にも言わぬ大時計

青森市 工藤甲吉

人間の弱さ自分を可愛がり
一生を馬鹿になり切るむずかしさ
煩惱を払い切れずに年が明け
ドラマにはならぬ一生だつてある
返済を三顧の礼でお願いし

桜井市 岩本雀踊子

あきらめが良いので悪女かも知れぬ
はみ出した男でいつも冬を抱く
裏切らぬ味方と妻を信じてる
夫婦坂起伏を越えるとき夫婦
鏡の裏かけぬけている月日

八尾市 高杉鬼遊

如月や江下北川作江たち
エメラルド妻誕生の石もなく
増税へ赤子なに言う御名御璽
一夜二夜やみに溺れる寒椿
酔うてない目に環状線は逆回り

八尾市 香川酔々

カミソリの充電済ます大晦日
百八の五十あたりで睡くなり
伝統を守り模型の餅飾る

人ごみのごみのひとりの初詣
押ピンが踏んで欲しいと上を向き

岡山県 濱野奇童

昇任の試験へ白髪 of 眼が燃える

恋人の噂を花屋の隅で聞く

四季のない花屋で春の彩を撰る

春の陽へ負けてはならぬ雪ダルマ

観光へ降ったお詫びの虹が立つ

鳥取市 河村日満

原独仙さんのダイヤ婚に

それだけで国の誇りのダイヤ婚

忘年会五つこなして新春を待つ

秋霖へ口数重き老夫婦

左から右へ思想もまわる老い

信心の寄附へ夫婦の気が揃い

大阪市 金井文秋

晩年になって夫婦の歩巾合う

理論には勝ったが客を怒らせる

腹芸が馬鹿正直に通じない

ちつばけな無駄を言うから気が合わず

無駄な灯をこまめに消して嫌われる

大阪市 西森花村

マンションも蜂なら窓から出這入りし

出稼ぎに山が恋しい雪が降り

うさぎ小屋定年ま近のうさぎです

離婚してから女若返り

ボイラー室ビルのどん底暖かし

大阪市 川口弘生

地下鉄の階段憎いものになり

決断をしたのもしないのも鬼籍

ちよっぴりと赤老いのアクセサリー

写経筆無の字無の字を書き馴れる

一つ家いずれ別れる掟もつ

倉吉市 奥谷弘朗

おもむろに保守派の開く伊勢暦

お互いにマークしていて引っかかり

とある日の身内を敵として眺め

ちぐはぐの予想へシヨック大き過ぎ

肩肘を張った姿がよく目立ち

竹原市 山内静水

誌齡三〇〇滾滾と亡師のことば

誌齡三〇〇過去語るまい忘れまい

誌齡三〇〇餅っこの鏡餅

思いようとりよう決心やつとつけ

寝てくれぬ一つ覚えの子守歌

大阪市 河野君子

父と母のように夫と訣れよう

へそくりが小さな主張持っている

檜山より寂しい部屋がマンションに

七曲りの道だふりむいたとしても

これからの地図で見つけた細い道

大阪府

中川 滋 雀

島根県

堀江 芳子

嘘一つねじふせられぬ煙草持つ

遠回り落葉の道が呼んでいる

ポーナスよ妻の打算が待っている

有難迷惑も一緒に包んである歳暮

領収書一通もしやを抱くポケツ

竹原市

小島 蘭 幸

新宮市

大矢 十郎

大役の事後承諾をよしとする

なんと素直な鏡の前の女たち

みんな裸になればいくさはないだろう

酒と女と雪は静かに積もるべし

狂えない哀しさがある十二月

米子市

小西 雄 々

米子市

八木 千代

中流の翳りへパートの妻と耐え

相場欄端株もつても目にとまり

決断をせかす女の涼しい目

保護色に染めた頃から自我が消え

定年へほしい敗者復活戦

島根県

堀江 正 朗

米子市

林 瑞 枝

けんめいになれば耳鳴り増すばかり

これしきにもう年を読む気の弱さ

見えぬ目の怒りは妻にだけ分り

音みんな消えて耳から眠くなり

音聞けば睨に画ける絵が少し

マイペース人の歩幅は気にしない

帯結ぶそばで話して夫は待ち

去んでよし来てよし孫と保つ距離

去ぬ孫を待ってたように夫あまえ

妻と書く欄へ幸せだと思ふ

金使う事に専念して女

月曜病私も御多分に洩れず

大部屋に医者より詳しいのが一人

三分の理法相の説く人の道

もし癌と出たらあなたはどうか悟る

夢の痕は罪とも冬の太文字

ねぎらったつもりか妻の下手な嘘

冷凍魚の涙にひかれるように買い

五線譜の最後の音がたのしみで

親切な人だけ見える仔犬の瞳

折れ弓の過ぎにし道へ悔いも無く

忍耐を道連れ愛の手が温い

税務署が来る人生の花盛り

ほつれ毛の表情髪とは見せず

人嫌い居留守の逸話持つ歌人

米子市

石垣 花子

バラのトゲ花泥棒をあわてさせ

正直な人が素直に青を待ち

亡夫恋の気をそらす趣味へ凝り

言葉尻とらえて折伏喰い下がる

勲章のように注射の跡を見せ

和歌山市

野村 太茂津

算術も解けず数学ひけらかす

おひとよしに見せてる裏に気付かない

熟慮して迷う血の気がまだ残り

ポケットの拳は軍刀握ったことがある

灰汁抜けぬまだリーダーの席保つ

大阪市

小出 智子

電話帳積んでひっそり生きている

待つときに来ない廃品回収屋

もんどり打って何の防備もない軀

大阪は嫌いなままのほうがいい

一人になつてからの話を妻がする

大阪市

江城 修史

零細の愚痴は十指にあり余り

記憶とはかなし脳裡をよぎる影

無為無策さらして尚も描く虹

凋落の木々の葉音よわが命

労わりの中の皮肉が胸を刺し

倉敷市

水粉 千翁

裏返す枕に忘れようとする

トゲ抜いて忘れられない傷でよし

もつともな話は夫婦だけのもの

鬼子とは噂の中で愛すべし

化粧しているなと妻へ安堵する

島根県

小砂 白汀

輪をかけた噂足下へ帰りつき

もろただけ返すも貧しきもののうち

老残のくり言籠の蟹の泡

草萌ゆる栄枯盛衰など忘れ

おんどりへ鳴かねばならぬ朝がくる

出雲市

原 独仙

十二月あの会この会飲む機会

老二人せめて師走へ障子貼る

艶聞の主はお隣り七十五

滝登りしても見たかろ池の鯉

ポインターへハンターの腕笑われる

大阪市

天正 千梢

頭でっかちが打手の小槌を拾つて来

老人のたわごと消しごむ使いすぎ

六十年カレンダーのままだに流されて

スタートが安易実現遠すぎる

平等に片道切符いただいて

大阪市

津守 柳伸

騙されてだます身になる果報者

知らぬ間の電気椅子なら座るだろう

空しさに涙は出せぬ一人旅
荒れた手に木綿が似合う労働歌
美しく美しくなる逝ったひと

大阪市 西 出 楓 楽

年の瀬へ金と日にちが飛んでゆく
図体の割に小さくていじけた字
何となく老母へ電話の忙中閑
三猿になったりやめたり年の功
好々爺になって欲しくて甚平縫う

京都市 都 倉 求 芽

年の瀬や妻とすれ違いの日が続く
長男の言葉のはしばしに出る大人
平安に包む嵯峨野のささめ雪
勘忍の言葉で弱氣自認する
遭難のニュースが映す海は風ぎ

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

逃避行哀しや時効のりきれず
無色透明の言葉が夢の中にある
銭湯の口は生木を裂くところ
背の子の通弁もしてたのしそう
背囊に尺八入れて来た心

松江市 柳 楽 鶴 丸

指サックに思考こらした隠し芸
馬鹿がいるから俺も浮ばれる
四捨五入してかろうじて中流入り
退職をすれば部長も粗大ゴミ

運不運と言う言葉は大嫌ひ

竹原市 森 井 菁 居

旅人の二度とは踏めぬ始発駅
虹摺めないまま凡夫の四季めぐる
二枚目のもろさが命取りとなる
勝負師の弦張りつめたままで良い
悲しみの二分の一も妻のもの

出雲市 板 垣 夢 醉

出て行くわ買った言葉がくやしまれ
ボinasで底冷えやつとゆるみだす
恩きせるわけではないがとやはり恩
女房にバレて切られの与三をきめ
苦しみは惚れたと知ったその日から

松江市 小 林 孤 呂 二

どちらとも良く働いてきた銀婚
温かい絵だけを見つめている独り
くらしの敵ちらし広告は焼き捨てる
にんげんの数珠を持つとき敗けている
ソツのない男でネクタイ無地を撰る

倉敷市 小 幡 里 風

仏像のスマイル何を企むか
ライバルも正座を崩すお茶の席
その遺影笑っているから泣かされる
その仲が良すぎて話題のない夫婦
金魚の死日向へ話題持ってくる

岸和田市 高 橋 操 子

政党を越え人柄へ入れた票
好きだったから思い出も美しい

養老院のボスに身内がなさそうで

子沢山どの子も同居いやと云う

相談がすめばサツ／＼と帰る父

鳥取県

川崎 秋女

生きること二月の金魚に教えられ

単独行動うらの裏まで見抜かれる

横着と言う語を飼っていた炬燵

大根を漬け終えた夜の安らぎよ

あの時もこんな小雪が降っていた

岡山市

時末 一灯

市政だより建前論の花ざかり

ポケットベル猿まわしの紐手操られる

過去などは振りむかないとは器用すぎ

泣きもせず笑いもせずにワルである

空を見ることを忘れた日がつづき

西宮市

藤村 メ女

雪国の春よこいこい童唄

留守中に孫が来ていた置き土産

沈黙の背中メッキがはけて来る

海の青すくうとイメージこわれそう

イメージとピツタリだった遺児を抱く

京都市

山本 桐下

心音を確かめ冬の産科出る

合格を祈るに寒し絵馬堂よ

うるさいが愛犬忠実に吠える

誰の手も借りぬ軍手をきょうも干す

初仕事の朝トースターのパン跳る

鳥取市

小林 由多香

経験がファイトに負けた汗苦しい

交替の人材持たぬ負けいくさ

終戦を知らない兵よ国栄え

聞くだけは聞いて助言にこだわらず

アドバイスきれいにわなをぬけさせる

和歌山市

松原 寿子

レモン一滴もえる心へ泌み透る

火種すこし花芯に抱いて白椿

淋しくて残り毛糸をもてあそぶ

舞う雪の純真さにもある驕り

修羅の雪慕情の裏へ降りつもる

和歌山市

杉田 周穂

猛犬も家の平和に折れている

野良犬の群に青春投じすぎ

入口で非常出口を確かめる

円満な人の承諾後まわし

円満な顔その人の罪憎む

東大阪市

斉藤 三十四

黄門の芝居は印籠で恐れいり

道行きの二人へ花道紙吹雪

昼はそば夜は赤坂というブラン

大陸の思い出たずねジャルパック

トレパンの下へ一枚着込んで出

大阪市 本間 満津子

この平和空しと思う日の奢り
借金のないのを財産とも思い
張り替えた襖へ聞かすひとりごと
用のない身の居所がない師走
公園の日向枯葉の吹きだまり

大阪市 神夏磯 道子

真つ白なエプロンで迎えるお正月
九宮鳥簡単に言うごめんなさい
体力と体重計が比例せず
大いびき何にも勝る幸せよ
冬の陽がもつたいなくて歩きます

和歌山市 若宮 武雄

終戦を知らぬ遺骨にわびる屠蘇
戌どしに生れて道をまだ迷い
潤いを得て落ちついた枯葉達
水仙の匂いへむなし愚痴ひとつ
純真の日はあったんだ竹とんぼ

和歌山市 西山 幸

無造作にノイローゼだと他人は言う
明かるみへ出せば煤けた自画像よ
知らぬ顔する友人とすれ違う
戦争と平和を生きてくり返す
不器用で死ぬまで折れぬだまし舟

和歌山市 浦野 和子

雲悠悠人間何を慌てとる

一步出れば忘れる特技持つ女

裸木のまわりへ空気澄んで来る
自らが組んだ演技にほだされて
目に触れるものの皆いとし落葉道

島根県 西村 早苗

しきたりがまだ玄関にある靴を脱ぐ
誘惑もなく土曜日のロッカ閉ず
その人のすがる瞳をなぜ逃げる
稲妻をまぶたに旅の思い出よ
古傷からラッパの音が聞えて来

島根県 榊原 秀子

母からの便りもみじが添えてあり
恍惚の昔むかしはよく覚え
縁起などかつぎたくなる不幸せ
脇役のデリシヤスサラダへ格好よく
ドクタースランプ親子へ読ましている魅力

西宮市 野呂 鶴汀

善人と見てか番大目をそらし
静かなり時計の音が恐しい
歓迎のアーチに盗人立ち止まり
労働の喜びを知れ蓑虫よ
許す気になって初孫抱きにけり

京都市 山本 規不風

寝過しを間違ひ電話に起される
灰皿に思案を積んで十二月

捨てぜりふの女に道が又狭い
渴き持つ温かい手に騙される
止り木を増やして迷う姉妹鳥

鳥取県

林 露 杖

孤にこもる老友の棲家の枇杷の花

うっ憤の次は自慢を聞かされる

好日と見られ無職の年の暮れ

合槌のよさを味方と見た誤算

旅の湯に妻の女が甦る

倉敷市

野 田 素身郎

本家より幾らか下げる寄付の額

沈黙を唯一の武器として対峙

改造内閣組上に忘年会はずむ

休職中の夫が邪魔な十二月

落葉踏む音もリズムにのった試歩

倉敷市

白 井 三林坊

憤りかくす煙草が輪にならず

弥次馬の明日は吾が身を考えず

安らぎか諦めか老妻鶴を折る

人妻となつて八重歯を抜いていた

元旦の犬空腹に耐えている

倉敷市

稲 田 豊 作

首枷をバーの女は直ぐ外す

一言を咽喉にとどめて恙なし

親睦の鍵は琥珀の酒が持つ

母の座に坐ると女強くなり

電柱を登つて飢えたかたつむり

岡山県

嘉 数 兆代香

その義理を果せば古い奴にされ

断ち切った筈の影絵が追うてくる

影法師が味方とおもう坂のぼる

血の濃さに傾むく独楽の芯である

も一人のお前に勝てと天の声

東大阪市

市 場 没食子

婦唱夫随その婦が歳に勝てず呆気

弱肉強食人間だろと虫だろと

着膨れて西高東低の冷えに耐え

親に輪をかけた息子の頑迷さ

隠れてた慾が撒餌にひっかかり

岡山市

川 端 柳 子

つっぱつては駄目と夕陽が去つていく

神様を味方に角を引込める

冬の天殊更派手な色を着る

つつましく差しても目立つ赤い花

愛分析リングの皮が長く垂れ

東大阪市

森 下 愛 論

二の腕の白さお燈明まで届き

ナフタリンの香り漂よう見合席

交番のコップの菊も真盛り

デートの時間へ茶袱紗またゆがみ

佳い事があつて袱紗の色を撰り

西宮市

杉 浦 婦美子

助つ人にいつでもなれる母がいる

お茶菓子に注文つけて座る仲

不調法ですと結構飲んでみせ

待ちわびて女が濡らす火打ち石

キザなセリフ聞いて沈んだ角砂糖

兵庫県

遠山可住

一口にわしの跡継ぐ飲みっぷり

たくわんの音がおいしいにぎりめし

握手した重さじわじわいじめられ

貧しさが消えて故郷が他人めく

一歩出ずれば颯爽と靴が鳴り

藤井寺市

児島与呂志

新しい年に褒め言葉などいらぬ

暖かい父の言葉に逆えず

妻の背がだんだんまるく動くだけ

二女三女味方にならぬ歳になり

まだ雪が残る故郷を去る孤独

エンジンの音九州ヘリズミカル

伊丹市

檜谷寿馬

稜線に放牧の影並ぶ阿蘇

温泉の電話で旧交あたためる

魅を池に投げる男の背の寂し

二泊三日の夢一瞬に着く伊丹

松原市

玉置重人

賑やかな分だけ福笹高く掲げ

改築の一番風呂の湯のかげん

ジョーカーを持つと浮足立つてくる

千匹の鬼にもなろう千羽鶴

臨月の嫁の瞳に負けるべし

兵庫県

河原みのる

いつそもう一億役人総汚職

ヴァイオリン次には何が出るだろう

世はさかき田ンぽ売ったをけるがり

珍らしやボクでよかったキジに逢い

正月よボクだけ除けて通れかし

鳥取市

両川洋々

半生記めくるページに酒が沁み

核心をズバリ突かれた酒に咽せ

母国語はいいな大陸孤児帰る

秘書の持つ手帳マル秘をしゃべり出す

天下りの男へ序列狂わされ

寝屋川市

江口度

蜘蛛の巣の真ん中におる陰のボス

秒針がガクンと動き昼休み

霊柩車矢つ張りのろい十二月

つくられた話題ではずむ見合席

お天気の話上司の奥さんと

堺市

高橋千万子

振り向いた時からひとりの女です

微笑しても何と空しい影法師

待人来ず茶漬ですます夜の底

十二月財布の鈴がなりつづく
年の暮朝々チラシにある戦さ

寝屋川市

柴田 英壬子

三年坂寒さも二人にはうれし
野良犬と話はしない盲導犬

この音この音数の子はカナダ産
文法にあやまりがあるコマーシャル
明るさとなぐさめ控え目に見舞う

堺市

大道 美乙女

ひとり子へ期待の積木高く積む
石で打つ釘は未練を裂きちぎる

祭り笛故郷に捨てた恋ひとつ
過去なんかもう振りむかぬ束ね髪

家族して二派に別れるプロ野球

兵庫県

辻 文平

着せ替えの人形厚着になる寒さ
写経する紙の白さへ亡母が住む

忘れてたところにあつた花鉢

また一つ未練が残る昼の月

口開けて並ぶ目刺しを笑えるか

奈良県

村上 春巳

年賀客引上げ安堵とさびさと
愛憎を雪に埋めて駆暮れる

砂時計ひっくり返すいい電話

騙されてやれる生活を良しとする

霜蹴って野良犬今朝を生きんとす

孝行の最後葬儀屋儲けさせ
保護色を嫌うと牙が生えてくる

秒針が進むと過去の彩になる
世渡りのうまい男がけつまづき

衣食住足りて少年暴発す

町田市

竹内 紫鏑

通勤の起点終点いちようの黄
馬拉ソンの勝者の英語よく判り

ブレッシヤーよその国ではガムをかみ
ニヤミスを避けた社員の式二つ

夫人から喪中のがき淡々と

香川県

岡田 拳法

数だけの国連オシヤベリ広場です
全方位外交三拝九拝右顧左眄

ウロチヨロとソ連潜水艦座礁

反核へ米ソもポーズだけはとり

総裁選睨み大臣取替える

能野市

坪内 冬花

下げられた白髪頭に意地が負け
盗む気がないが柿の実赤くなり

もう別な神に頼んでいる浮気

なけなしの金コマーシャルに持つてかれ

ばったりとイロハ習った師に出会い

神戸市

仲 どんたく

喪の初春は一献仏へ差してから

美祢市

安平次 弘道

そろそろやないかと和尚から年賀
もうとまだ古稀それぞれに受けとめる
ラストラウンド鐘鳴る除夜の鐘が鳴る
思い出に炎の色と水の色

神戸市 山口 美穂

真心だけきける補聴器が欲しい
バーゲンまで待つ気ウインドのぞくだけ
謎かけが解けず明日を見失う
枯葉舞う路へ影法師が二つ

カラオケは苦しい悲しい愛のうた

富田林市 和田 維久子

有りがとう言えた児の胸たたえよう
胡瓜もむ窓に女の縮図あり

通行止め裏街道で手をつなぎ

一たす一は二にも三にもなる浮き世
負けて勝つそんな瞳のすばらしさ

岸和田市 福浦 勝晴

ピエロ哀しシャッポを脱ぐとお月さん
生きていて嬉しい春の酒に酔い

木枯しに吹かれっぱなしのクジの列

おばあちゃん独りでテレビに手をたたき
漫才が駄法螺を吹いて年暮れる

奈良市 森田 カズエ

坐り込み菓子パン抱いて列に居る
お詫びして訂正します声ソフト

番犬のノルマは小屋で吠えつつけ

一男七女の長女で姪の温い声
絶対に忘れない気で置くメガネ

檀原市 岩井 本蔭棒

もう一度念を押される生返事

みの虫よ宇宙の謎が解けたかね

天折の報せを運ぶ白い風

老杉の威厳は人を呑んでいる

一寸だけ痴漢になってボルノ出る

三重県 川上 溪水

どこからか視線感じて無礼講

見て見ない振りする無口の目のやりば

無駄だとは云わず経験したと言ひ

励ましてくれるが貸すなど言わず

ブライドの高さへ実力比例せず

姫路市 大原 葉香

マニキュアの指に女の性が住む

やせたいと願うぜい沢世に溢れ

孫二人預かり老いの生活譜

柿も渋ぶ抜かれて佛になつてゐる

ミニサイズの宿のタオルの悲しさよ

青森県 五十嵐 操史

コップ酒小さい愚痴を耳にする

人間の弱さに智恵を貸してやる

軽率な癖を知つてゐる姉女房

凡才を見抜いた先代目が高い

悪い事丈親の血を引いてます

生駒市

草深醉升

へい一寸そこまでですと医者通い

木蓮の帽子揃えて冬構え

じつと待つ花芽自然に逆らわず

この年で今更何を神頼み

画に描いた餅も後退する福祉

浜田市

中川幸一

泣き面を刺すもと妻という他人

雲動く秋の浮気を秘めたまま

検査などせずともガタは知っている

改札が埴輪の貌でキップ切る

負けてから親方になる相撲部屋

宝塚市

傍島静馬

家の長寿記録年々おやじが更新す

ライバルの抜けた試合に身が入らず

石焼芋屋と会釈を交わすヅカガール

皿数に沢庵二た切れはいってた

松江市

恒松町紅

退院が近いベッドの千羽鶴

片付いたあとから散らす子が帰り

湯治場の暗い灯りで聞く民話

暖まる話で酒がよくまわり

平田市

久家代仕男

鎌首をふり再燃の増税論

名器いま利権癒着の音で鳴り

窮極で芯の強さを学びとり

出しゃばりの男へ吹矢よく当り

松江市

舟木与根一

推理物に趣味が変わって秋深し

ひやかして観せた手相におどかされ

実印の置き場処探している平和

金策もジングルベルの流れに居

柳井市

弘津柳慶

亡き妻の面影次々旅の宿

寂しさは孫へ受話器取り上げる

妊娠と聞いて父親ついに折れ

潮どきと見て仲人は気をきかせ

島根県

錦織文子

澄みきった秋へは嘘を言いそびれ

秋の夜を自分のものとして許される

予定表ぎつしり埋めて十二月

紅葉燃えて西海橋は渦の上

京都市

松川杜的

三日月の夜空がソ連の旗に似て

棒にあたりたい師走の街歩く

六十路未だ坊主めくりの姫を待ち

清水寺管長良慶さん

しつかりしてます百六才の河内弁

松江市

梅本登美也

ノーチップ皮肉混じえて送られる

以下次号異色作家の咳払い

ベテランがふつとぶつかる厚い壁

どの色もみんないとしい花鉢

仙台市 川村映輝

気の強い母に素直な娘が育ち

父よりも母よりも長生きをして思うこと

前例がないと断る無為無策

余生などと甘ったれては居られぬ世

島根県 木村はじめ

防衛はするが軍備はしない国

ドラキュラのようなロッキードの主役

靖国で大臣軍靴に迎へられ

ザル法を尻目に札の束が飛ぶ

松原市 北野久子

再会の夢へ白髪容赦なく

惜し気なく撤くので大事にされている

居てほしい嫁いで欲しい娘を眺め

湯がたぎる夫の耳も頼りなし

島根県 角耕草

コンパイン注連絢う藁は刈り残し

鯉の竿の列のどこかで釣れており

神々がお発ち出雲は冬仕度

玄関で柚子湯が匂う靴を脱ぎ

松江市 竹内寿美

峠を越えたら異なる風に逢う

空っぽの甲羅が威張る蟹の群れ

御似合の服で値段が気に要らぬ

追い風に騙され道を間違える

諫早市 原田明春

まな板のくぼみは女房の歴史かも

俺を見捨てたか一本一本歯もこぼれ

味わって食べる余裕のない家計

あの顔をほめる言葉のむずかしさ

松山市 谷真風

立話喫茶へ誘うて断られ

姑を笑いとばして嫁笑う

うまいお茶入れてもらって長居する

生かされてまた新年が来るらしい

和歌山市 福本英子

ころもで貧しくなったら別れよう

叛くかも知れぬグラスへ注ぐワイン

しっぽくは女ひとり温める

不渡りへ父子が走る小商人

枚方市 稲葉星斗

古本の昔の定価懐しみ

バック持ちぶつかり合ってる年の暮

物価高正月準備ぎりぎりに

ポーナスはうれし思案の十二月

寝屋川市 宮尾あいき

老体の私を風邪はみすてない

香煙のゆらぐ仏間で亡夫と居る

成仏を願う亡夫へ無理も言い

飛行燈しばらく星になっている

竹原市 時広一路

五百羅漢私に似てゐるのは居ぬか
活字にはならぬ肩書負うてゐる
ぬるま湯を出るのにかけた一二の三
近道を通つた方がまだ着かぬ

大田市

藤田 軒太楼

朝靄が晴れてライバル居る野池
思ひ出は遅々たり冬の流れ雲
駈け足の号令そこまで来た日本
胸に一物あれば小石も邪魔をする

大東市

土岐 トク子

キナ臭い都塵に耐えて夢を追う

相愛の睦みを妬む月おぼろ

金策の背へ木枯しが音をたて

荒廃の屋敷あと冬菊ひとそ咲き

倉吉市

渡辺 菩句

この寺の本尊ここも美人です

腹割つた握手で手がしびれてる

才能とは別な世間を泳ぐ術

土壇場のここ一番の大あぐら

富田林市

中村 優

アクセルへ婦警が柳眉逆立てる

熟年へ火種をつける子が産まれ

戦中のモンベ見直すファッション

晴れという天気予報に賭ける旅

守口市

羽原 静歩

初春の闘志名刺をチラリ出し
釣革へすがるいのちのいとしくて

愛大卒業の同窓会（於松山56・10・27）

集い来て時の流れの顔を持ち

無一物無尽蔵落葉しきりなり

枚方市

水野 弘

アマールで飲む零囲気のコーヒード
メキシコで見る満月や母思う

往年のスターが老いる身も老いる

マンションの灯りちらほら不況風

笠岡市

松本 忠三

天降り任に非ずが座にすわり

目印は胸のリボンに団体旗

外面へ立てておきます主人です

ボーナスを貰いながらのストライキ

和泉市

西岡 洛醉

湯どうふの湯気へ華やぐ声が伸び

生きる事それが浄土と悟り春

天職へ五十路まだまだ霜を踏む

生命線五十四歳けつまづき

七尾市

松高 秀峰

気休めの言葉を探す見舞客

年賀状だけの絆が続く友

血圧を薬でなだめ酒で上げ

栄転へ妻も白髪を黒く染め

今治市

越智 一水

障子戸にはたきかければ歌がある

主催者が原稿書いている祝辞

桐落葉僕を追いつ越す十二月

山すそで陽をはね返えす紙の村

和歌山市 内芝 登志代

書初めの筆は芽出度い文字へ生き

新築へもう亡母偲ぶ部屋がない

満ち足りたくらし溺れてゆく不幸

珍しく鴉が啼いた日の不安

和歌山市 坂口 公子

淑女にもあつたも一つ夜叉の面

柿すだれ見えませす母の故郷便り

振り向けば俄か作りの笑みに合う

さよならは言えぬ舅の白い髪

泉佐野市 室谷 徹舟

目一杯言うて後はないとは殺生な

デパートの包装紙も見栄のうち

落葉さえ集り易いところがあり

温泉で理性と戦う一人旅

宇部市 平田 実男

死期近い父へ(二句)

秒読みに入り空気も重い部屋

病室を去るたび最期と言う覚悟

割勘へ飲めぬの時計ばかり見る

平凡な女じゃなかった前夫人

守口市 羽原 静歩

キャンセル待ちお後もどうやら満席で

松山紀行

しぐれてもしぐれても同行二人

寅さんがいて倍賞がいて面白し

しまい風呂王者の如くつかっている

八尾市 飯田 悦郎

さようならの胸はしばらく燃えている

泣いている女土壇場弱くなし

運の悪い人を見て来た事故現場

うかつには言えぬ近頃物忘れ

下関市 国弘 半休門

年賀状手書きを添えて血が通い

雲仙の師走疲れた肌と見る

偏屈で通し信用されてます

先生へおじぎする子を冷眼視

大阪市 藤田 頂留子

野心家の手には近道だけの地図

街路樹がさんぽつされた広い空

歳末の紙面悪知恵コンクール

マイカーの今日自転車に追いぬかれ

大阪市 河井 庸佑

ごり押しをしといて納得させました

肩書きへ敬意を示しただけのこと

やんわりといちばんきついことを言う

親友がライバルとなる昇任期

大阪市 西川 善紫

回り道したが人生悔いは無い

心鎮まらぬか笛の音が乱れ
窓閉めても悪口耳に入つて来る
ブービー賞音痴の歌がもつて去に

大阪市

神田秀峰

ゆづり合う気はもう此の世見付からず
酒飲まぬ客へ妓は知らん振り
上役の知能犯へ平くさり
常識が消えつつ優先座席でき

大阪市

欄蘭

最低の生活へ追打ち物価高
風邪薬より玉子酒の良い明治
癌やそんなもう葬式の焼香順
米値上げ又米離れ増えそうで

大阪市

北勝美

落葉掃く簪は風に逆らわず
大根を洗えば頬つべた赤くなる
個性ある人と欠点ほめておく
八白土星春は待たれるバラの色

岸和田市

原さよ子

かな看板見れば大きな声で孫
雨宿り見れば向いにパチンコ屋
褒められて又も約束してしまふ
贅沢な心配事だと友笑う

岸和田市

福島せつ子

就職へ希望あふれる車椅子
夜警から帰る夫に卵酒

夙へ無性に吾子に逢いとうて
掃除だけ残して暮の用がすみ

岸和田市

狭間希久志

野仏に三叉路の嘘見抜かれる
ナツメロが想い出させる古い傷
謀反抱く女が掛けたサン格拉斯
一切を白紙に戻すひとり言

鳥取市

両川洋々

マルクスをいつかきれいに捨てて貯め
血走つた視野に損得だけうつり
安楽死への予約かポックリ寺が混む
良心の亀裂へ沁みる酒を酌ぐ

鳥取市

森田熊生

ポブラ枝落として冬のうわさする
青春の汗に計算などいらぬ
ふるさとの唄に生きてる父がいる
ドラマ見て泣いて倅せだと思ひ

鳥取県

清水一保

振り返るひまなく師走突つ走り
ハンカチが有るから涙美しい
秒針が切に響いてさびしい日

事故の足に想ふ

一生を俺と誓つた足背く

大阪市

横地雅風

村長さんですかと名刺珍らしい
缶公害ここにもあつた深い海

山国のここにも日本一のそば
勲章は自分にやると太い指

大阪市

岡田ふみ

珍らしや夫が一本つけてくれ
年令を強調しておく大失敗
人情がまだ残ってた裏通り
厨もうコトコト母の朝がある

岸和田市

島崎富志子

母と娘の対話もはずむお年頃
財産が無くて平和な父の死後
父亡くし母の涙腺もろくなり
除夜の鐘とにかく目出度い年が明け

岸和田市

古野ひで

寒月夜恋に破れた猫もいる
秋夜長女ひとりの硯箱
年金も走り去って十二月
半分は母の手を借る御裁縫

岸和田市

清野こう

風船がするりと子供の手から逃げ
幾歳を訪なう馴染の葉売り
柿一つ分けてこたつの老夫婦
責任を果してやれやれ帯を解く

鳥取県

金川満春

もう少し生きねば年金損になる
正直に生きて爽やか余生の日
ほのぼのと振れ合う老いの湯治宿

年賀状また一人減り二人減り

出雲市

石倉芙佐子

長い手紙は風のない日に書きたいな
動揺を隠しきれない千羽鶴
妻子もつ男は冬の風になる
ほうらね日暮は淋しい時間帯

出雲市

園山多賀子

避雷針立ててチャンスに逃げられる
意地だけは張っても折れる釘でいる
洗濯機男が廻すと雨になる
白菜を真白く漬けて女冥利

兵庫県

大江秋月

現場まで走る車のいや遅く
二台とも無残な車体道路脇
事故現場頭下げ下げ見てまわる
無事な顔見て平静をとり戻し

兵庫県

藤後実男

裏方の苦勞がにじむ七変化
景品をこっそり忘れた忘年会
消息を尋ねてみたい過去の女
脱ぎながら女男を近寄せず

島根県

梅みどり

毛糸玉ふんわり心を編んで着せ
御祝へ帯ふつくらしめて行く
からみ合うきずながとけるまあるい灯

一昔語る友あり四疊半

島根県

松本文子

葉も枯れていつか消えてた恨みごと

自尊心さらに傷つく犬が吠え

傷ついて繕いきれぬ紅い糸

野仏の今日は笑うて雨に座す

米子市

政岡 日枝子

花と蝶素敵な嘘がうずまくよ

中傷に敗けて女は城をあけ

のませない乳首ほんのり女なり

夫唱婦随女史の辞書には見当らず

米子市

桑原 伊都

すきま風ふさぎ茶の間の和を保ち

一日のリズムへ妻がタクト振り

行列を乱す蟻にもある気まま

満足のゆくまで老母の針は凝る

米子市

青戸 田鶴

趣味一つ妻生き生きと若返り

カラオケで家中歌手になつてみる

吹きだまり心の冷えを温めあい

鞭うって冷えた空気に堪えている

米子市

菅井 とも子

古稀すぎて減った賀状に励まされ

字の乱れ気になる老母の年賀状

旧婚旅行間近パーマもかけて待ち

カラオケで音痴堂々唄い終え

カラオケにためたストレス歌い捨て

結ばれる幸を待つてる薬指

世代交替父を追ひ抜く賀状来る

漬物も終えて山家の冬籠り

東大阪市

竹中 綾珠

本店長になった息子を亡夫に告げ

追憶の亡夫年取らず我れは老い

初舞台孫の度胸に舌を巻く

ちぎり絵を習い絵心試される

東大阪市

崎山 美子

余白から母の本音をふと感じ

朝食をパンにゆずった米の国

かくし芸音痴が一番座をわかせ

音痴だと思っていけないのが音痴

東大阪市

奥山 弥山人

人柄だけ賞めて商才にはふれず

仲人は親の人柄ほめつづけ

早三年漬けもの里の味になり

行間の味を社長は読んでくれ

高知県

松岡 三吉

整頓をすると書斎が寒くなる

片づけて散らかし柳誌それでよし

櫛入れて女ごころをまだ捨てず

悪人であつても開く自動ドア

高知県

赤川 菊野

米子市

雑賀 美世

風見鶏捨てた故郷の空を指す

旅土産コケシが童話つれてくる

人想う計算などのない心

気に入ったヘヤー逢いたくなってくる

海南市 牛尾緑楼

本音捨てきれず敗者の席にいる

辞表懐に男が歩む道

伝言のそこから生まれてきた誤解

ソロバンを弾けば医者の負けになる

岡山市 花田たけ志

ハンカチの演技にあまた迷わされ

目標がかすんで老いが早くなる

証言で技あり日記で効果あり

下心あつての会釈わざとらし

岡山市 井上柳五郎

盗み酒思わぬほどに酔いしれて

音痴でも軍歌となれば声をあげ

空涙拭くハンカチを女持ち

垣根より外向く花がきれい咲き

岡山市 岩道博友

だまされて帰る列車に乗り遅れ

教科書の材料だけで足らぬ味

被写体になる気が坐る位置を定め

捨てようと思う心に裏の顔

羽咋市 三宅ろ亭

低音とおだてばマイク離さない

有名となるまい知恵的となる

ペテランの鞭に新人鍛えられ

何もせず厳しく批判嫁のこと

永年の功が積つて勲六等

孫同志何かかくして喜寿の宴

育つものある嬉しさに今日が暮れ

雑音は日々に消されて冬木立

逆らわじ平和の鐘を信じ切り

どうしても逢わねばならぬ足袋を履く

へそくりが師走の街で羽根が生え

対話ない夫婦にテレビが笑わせる

どうしても言えない嘘はあきらめる

匂わしただけでも噂風にのり

淑やかな娘になったお振袖

おだやかな風を選んで一人道

雲の峰慕う孫弟子曾孫弟子

廃線になる運命の汽車に乗り

寝たきりのお世話尊し寮母さん

大会の代表その場を白けさせ

唐津市 新岡回天子

島根県 大森孝幸

島根県 吉岡きみえ

河内長野市 井上喜醉

貝塚市 行天千代

岡山県 直原七面山

島根県 山根峰雪

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

黒川紫香

人の情がふつふつと煮える関東煮

谷垣史好

人情がとしたい所を、人の情が、と表現した巧妙さがこの句の命である。ふつふつも、下町色が出ていて暖かい。

庭石の苔の子とも遠く住む

八木千代

手許から離れていった子ども達、そんな事を思いながら何気なく縁側で見た庭石の苔が美しく物さみしく思えたのであろう。

友だちがなんにんもいる町の犬

高杉鬼遊

幸せな犬ですね。誰にでも気軽に付き合える、そんな気持が人間にも必要である。八方美人、犬にもこんな言葉が当てはまるかどうか判らないが、町の犬が効いている。

我が道を行く犬塙の下を掘り

西森花村

私の家の近くにもこんな犬がいた。別に泥

棒犬でもないが、一途に思ったことをやろうとする気持に微笑ましさがある。

毛の長い方が男とふと気づき

森田カズエ

近頃は服装も髪型も男女の別がないようになってきた。おじいちゃん、おばあちゃんは嘆くかも知れないがこれも御時世だ。

雷雨霽れ初雪のケア仰ぐヒロ

前山北海

ケアとはマウナケアのことだと思ふ。ハワイ島、否ハワイ全島の中でも一番高い火山である。暖いハワイで雪が降り、スキーが出来るのはここだけと聞いた。ハワイ島の主都ヒロの街から遠く山頂の雪を私は最近眺めてきた。観光地で有名なキラウエア火口からもしっかりと美しいケアの山が見られた。

子を産めぬ丸い乳房が哀しくて

両川洋々

日本一のおかかと言われる北政所ねねにもこんな悩みがあったのであろう。実の子があれは豊臣家の崩壊はなかったと思われる。

地に還るまでを枯葉の子守唄

松原寿子

ハラハラと落ちる枯葉、美しい緑を競っていた頃の初初しさは消え、やつれ衰えて風に舞う姿は、新しい芽を育てる子守唄となつて落ちる。人生の縮図を見るようでもある。

美智子妃の帽子高からず低からず

神夏磯道子

日本のトップレディー美智子妃の御姿を本当にうまく表現されている。

自画像に化粧させねば絵にならぬ

杉浦婦美子

美しく見せたい女の性をのぞかせているような気がする。化粧させたために、かえって自分を失わねばよいが。

降るような星を眺めてバスを待ち

欄蘭

田舎でバスを待っているとこのような空に出逢う。都会では見られない星空の美しさがある。

道連れに女闇夜によくしゃべり

荻野鮫虎狼

闇夜の怖さをまぎらわすように女がよくしゃべる。きんさんと声をふるわせて。

脱サラの思いついたはラーメン屋

藤井春日

月給とりをやめたら、ラーメン屋でもやろうかと安易な気持ちで考えるものだが、果してうまく行くかどうか。

人間を描くと父の顔になる

大峠可動

子の描くどの顔も、どの顔も父に似てくるのは止むを得ない。一番手近で親しい男の人は父だから、女の人を描けばきつと母の優しい顔になるのではないか。

ほどほどの嫁で気兼ねのないくらいし

内芝登志代

ほどほどの嫁というところが嬉しい。可もなし不可もなし、きつと姑との仲もうまくいっていると思う。明るくて楽しい家の中を彷彿とさせてくれる。

月 原 宵 明

雑草に任せきつたる待避線

期することあり早起きを三日ほど

年寄が三人よれば死ぬ話

妻の座の居心地すこし肥えてくる

赤いシャツ着ている方が男です

本 田 恵 二 朗

浪花節的な情けを押し売られ

決めかねたあげく神さま仏さま

二階から大きな欠伸がころげ落ち

悩むだけ悩めよそれが若さだよ

待望の産声ちんちんさげてるぞ

黒 川 紫 香

同名異人に少し興味持つてみる

愛人でいいわと怖いことを言う

お金にはならぬ用事の靴を覆く
幸せな奴ほど先に軒かく
憎めない顔で噂の主が来る

正 本 水 客

飛驒高山

飛驒ここに京のみやびと江戸の粋

梁組みと土間の空間にある歴史

風物詩として朝市が生きている

陣屋の白洲敷かれた小石に冬がいる

出格子の円い庇の雪もよい

浜 田 久 米 雄

新米へ箸をきれいに洗つて来

自慢げに言える年齢ありがたし

十二月喪中につきはあわれなり

物差しはないがきまつている長寿

心足る古いへ年賀の来る日なり

若 本 多久志

羨ましがられる齡にある空虚
米寿な非凡の欲は九十まで
古傷の痛み不眠の夜が続く

これも又生きていますという賀状
むしつては飲みむしつては飲む海の幸

長 野 文 庫

世話好きが世話焼きになり嫌がられ
薬漬けも入れて平均寿命のび
親よりも先生の見た目がたしか
立った儘陳情団がかしこまり
泣きそうな顔を棧橋から見上げ

大 坂 形 水

ロボットが人使うときつと来る
平均寿命延ばしたように言う薬

わるいことしてないのに百叩き

正月をパジャマのままの座敷牢

コーヒーが飲みたくなって癒りかけ

若 柳 潮 花

君とならひとさし舞うてみたい新春

降るように山茶花が散る風の音

君の掌に乗る仕合に書く賀状

若柳流四代目家元襲名舞台

歌舞伎座を流派の紋で埋めつくし

忠信へ静がからむ都落ち

尼 緑 之 助

ほのぼのと隣りの築地から日の出

若い気のよたよた師走のハイヒール

流通のさだめ大根空を飛ぶ

鼻髭も帰った晦日無人駅

つけばくる悲恋のかけを追うように

川柳 太平記 (45)

新聞柳壇の初登場

東 野 大 八

日本新聞（東京電報改題・発行部数五千）

は、明治二十二年二月の創刊。創刊当時の社長は杉浦天台だが、多士済済の十余人の論客を率いたのが主筆の陸羯南（くがかつなん・本名中田実）で、第一次伊藤内閣の伊藤博文首相や、井上馨外相の唱えた鹿鳴館を作つての欧化主義と、その藩閥政治の偏向を激しく攻撃した。掲げたのは民本本位の国粹主義だ。陸あつての日本新聞の命数は、明治二十二年から同四十年までのわずか十八年で解体されるのだが、何さま反政府的言論が災いしてその間二十三回の発刊停止を命ぜられた。その何回目かの発禁を食つたさい編集長格の古島一雄は、正岡子規と牛鍋をつつきながら「このことで何か一句ないか」

と子規に持ちかけた。折から発禁日が二百十日に当たっていたので子規は言下に答えた。

—君が代も二百十日は荒れにけり

よくもたつた十七字のなかに、ずばりその本態を捉え切つたものだ。古島は感心した。と同時に古島の念頭に、新聞にこの種の風刺が必要だという一事がひらめいた。寸鉄人を刺す鋭利な時局批判の十七字——そうだこれにふさわしいポンチ絵がつけば申し分ない。

さし当たり時事吟は子規を煩すとして、ポンチ絵の画家を誰にするか、顔なじみの洋画家の一人浅井忠に依頼したところ、推薦してきたのが中村不折である。

「この男は、つんばで強情で一筋ナワではいかんが君なら大丈夫。腕は僕が保障する」

早速古島は不折にあうと

「僕は貧乏で絵具代に事欠く。だから下宿代と絵具料を保証して貰えば毎日でも書く」といった。早速テストすると、不折は金玉均の暗殺や、足尾鉾毒事件を扱つた一枚絵を提出し古島をうならせた。この不折が日本新聞を介して子規と肝胆相照らす親友となる。

ところで子規と不折のコンビで、日本新聞紙上を飾つたものだが、どうも今ひとつ古島に、子規の時事吟が食い足りない。そんな折杉浦天外の学友で西松二郎というのがいた。彼は放屁癖があり、自ら芳非山人と名乗る変り者。それが第一次伊藤内閣の文部大臣森有礼の暗殺を諷した狂句を寄せてきた。

—有礼が無礼の者にしてやられ

—魔刀論者出刃包丁を腹に刺し

刺客西村文太郎に出刃包丁で殺された森有礼は有名な魔刀論者であつた。古島は膝を叩いて時局諷刺吟とはまさにこれだと悟つた。以下は「古島一雄清談」昭和26年毎日新聞社刊の抄録である。

—そこで早速、芳非山人に、新聞に掲載すべき時事狂句を頼んだが、どうも期待したようにかず、当時「团团珍聞」の常連投書家だった足立半顔という男を山人が推挙してき

た。しかし僕の所望は政治諷詠であつたため並の狂句では食ひ足りない。阪井久良岐にも頼んだが、これは江戸在来の川柳の域を出ない。子規と相談した結果、藤井紫影（本名乙男・金沢大学教授のちに文博）に頼んでみたが、これはあまり文学的で、隔靴搔痒のうらみがあり、遠い金沢在でもありあきらめた。ところがその後、井上剣花坊という男が、十錢叢書という狂句の小冊子を携えて入社を申し込んできた。その中にある句をみて、どうやらこれはものになりそうだと思った。

僕も当時、江戸時代の万句合や川柳に関するものなどを集めていたから、それを貸して研究させてみたが、市井の雑事を詠んだものはものになるが、どうも政治上の勘がない。仕方がないから在来の下女や手代の題材にかえるに女学生を用いて見よ、といったのがはじまりで、当時、海老茶の袴が大流行であつたところから、女学生を海老茶式部とやつてのけ、はては星やすみれの流行語をとらえて星童党などの新語を作つたりして一時世間を賑わせたものだ。――

海千山千の後の政客古島一雄にとつては、少々の政治諷刺などはさっぱり歯応えがないわけだが、彼もその述懐の通り、万句合や川

柳の古文献に興味を持っていた男。かくて政治諷刺吟をあきらめ、剣花坊の海老茶式部や星童党の人気を認め、子規の俳壇の向うを張つて柳壇を設け、一般からの投句に期待した。それがやがて剣花坊担当の新聞柳壇「新題柳樽」という新聞柳壇のいわばハシリとなつた。時に明治三十六年七月三日付であつた。

「はじめほとんど反響なく、七月から八月までに發表する自作吟は約一千二百句、九月に至つてようやく投句をみる」（井上剣花坊句集「昭和十年刊後書」）

「明治三十六年の七月三日は、日本新聞にはじめて新題柳樽（しんだいりゆうそん）という名をもつて、新派川柳の旗を掲げた第一日、これひとり我が柳樽寺に於てのみ記念すべきではない。いやしくも新川柳に遊ぶ人は必ず記念して貰わねばならぬ」（川柳 No. 34 明治41年11月号）

「これはいつだったか、剣花坊が髪を短くきつて、日本新聞社の編集室に入ると、誰であつたか「おや、君はいつ出家した？」と戯れた者がいた。そこで僕は「イヤ、出家は以前からしている。新題山柳樽寺の和尚だ」と応じた。新題柳樽の四字を洒落たのだ。（こんなことから）新題柳樽開設一周年の翌（明

治37年）の七月三日の日本新聞紙上に、はじめて新題山柳樽寺の六字を用いた。これを入が知り同人間誰いうとなく剣花坊の居室を称し柳樽寺の符牒にしてしまった（同）

「新題柳樽とする日本新聞の柳壇は、九月以降から次第に一般からの投句がはじまり、やがてはその常連の連中は、飴ン坊、角恋坊などの多くの作家を生み、後にはこの欄の投句者は何某坊と「坊」を雅号としないと、水に油の感があるほど坊づくしとなり、明治三十九年七月三日（四周年目）より、新題柳樽を断然改め「新川柳」と称するに至つた。

一方阪井久良岐は、明治三十七年四月二十九日の電報新聞紙上に「新柳樽」と題して柳壇を創設した。これと相前後して、岡田三面子は東京日日新聞紙上に「狂句」欄を設けたが内容は新川柳を目標とし、市村駄六はやまと新聞に「新編川端柳」田能村朴念仁は読売紙上に「榴柳」を設けた。新聞柳壇時代の開幕で、いずれも相提携して新川柳を唱えた」（海野夢一仏著「川柳史講話」）

誹風柳多留廿六篇研究 (五丁)

小野真孝・本多正範・石田成佳
大屋六郎・八木敬一・鈴木 黄
石田晋一・南 得二・多田 光

故岡田 甫

77 燭台をかりる使に何事た

小野 燭台は室内照明器具の一であるが、日常生活では行燈などを用い、燭台は婚礼などの改まった席に用いられた。ところで婚礼では結納から挙式まであらかじめ吉日を選んで日取りを決めておく筈であり、燭台を借りに来る程の仲なれば前もってその旨お願いしてある筈である。それが使に何事だと聞いたですのは余程急なおもむきと思われる。さすれば暮の支払いに困りはてて、急に所謂「暮の嫁」をとったものであろう。

本多 賛。燭台の必要な理由を言わずに、相手から「いったい何事だ」と問い返される使

の者の余裕のなさに、あわただしさが一層強められている。

しよくだいを何んぞあるかとかしてやり

四〇・20

八木 賛であるが、婚礼と決める必要があろうか。

鈴木 賛。とにかく借りられる方は理由はききたいだろう。

石田晋 「暮の嫁」に賛。

多田 賛。あつさりと鈴木説のように思っていた。

岡田 同。

78 暮かゝる軒端見て居る美しさ

小野 九恭帝七年二月、ひそかに藤原の宮に

幸し、衣通姫の容子をうかがわれる折に、姫も帝を想いて独言に「吾がせこが来べき宵なりさがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」と吟ぜられた。帝これを聞かれて返歌を賜わり、いよいよ御寵愛されたという。

この故事より衣通姫の美しさを賞した句であるが、単なる叙景句とみても、黄昏せまる軒端にはの白く浮ぶ佳人の姿を髣髴とさせるものがある佳句といえよう。

八木 衣通姫のきかせが強いことに異議はないが、「単なる叙景句」とみてもよさそう。

多田 礎稿に賛。

岡田 同。衣通姫の句。

79 けんしきハ花飾りにハから單箭

小野 遊女を詠んだ句。氣位はまことに高く花の如くきらびやかに色色と飾り立ててはみても、立派な單箭もつわべのみで内実はそこに入れるべき衣裳とてないから單箭、哀れというべきであろう。

おしいたんすを傾城はあそばせる

三〇・21

八木 見識は活花、飾には空單箭、としてはいかがであらう。遊女の部屋の調度、生け花は見識を持ってりっぱに生けてある。しかし單箭の方は飾りで中は空っぽ。

多田 けんしきは礎稿のように思っている。「花」は床花ではないか。つまり、遊女は氣位が高く花を与えても礼をいわないくらいであり、それだけの外見を飾るものとして中味は空ながらも單箭が置いてある、という部屋持遊女の外的な堂々の姿をよんだものが「花」はいずれにしても不十分な表現と思われる。

岡田 遊女は花の装いで権式ぶっているが、実はタンスは空っぽ……というのでしょうか。

80 苦肉の計略香はこに小ゆび也

小野 判ったようで判らぬ句。どら息子がない

じみの遊女から心中立ての為の小指をおくって貰ったのはよいが、さてその処置に困り、めつたな所に置けば親の目もつるさいし、いっそ香箱にでもかくしておくかといった所であらうか。

本多 傾城禁短氣に「氣付などの用意を頼み、味噌汁こしらへて初産するやうに、万の支度こしらへ置き、目を瞑いで切て後、香箱に入て遣る由」とあり、遊女の心中立の、切指にはかかせぬ道具の一といえる。

無心の手管にせつばつまつて香箱と小指で迫る。香箱と小指は苦肉の策の道具というわけである。

ゆび切ルも実ハ苦肉のはかりこと

一・31

八木 贊。本多氏、「禁短氣」謝。香箱に切った指を入れておく。それが「苦肉の計略」なのである。

多田 本多説に賛。ただ本当に切らない時もあつたようで、至文堂の「川柳吉原風俗絵図」に石川さんが、「これも手管として行なう場合があり、切ったふりや他人の指、ひどい場合は焼場の女死人、しん粉細工のにせ指もあり」と説明している。「苦肉の計」を深刻にとらないうにせ指切とも考えられるが……。

岡田 諸説に尽く。

81 びんつらゆふたやつかきを二人り持チ

小野 お手上げです。御教示を乞う。

本多 守貞漫稿 第八に「其様法隆寺太子堂の御影の前なる童子是古の髪なり」とあることから、主題句の「びんづら」は髪型をいうのではなく、法隆寺献納御物の聖德太子像に太夫と一人禿を見立てた句作であらうと考えました。

禿は高級遊女につかえ、その雑用を足すのが仕事であるが、まだ子供であるから、失敗もあり、茶目つ気もありで、手を焼かせることも度々あつたから「やつかい」といったのである。

石田成 やつかいなのは、手をやかせる等面倒を見るだけでなく、遊女の手許に預けられると禿の衣裳その他の調度はすべて、その遊女の負担になるためと思います。

多田 びんつら結ふた何々」は特定の書物とまで行かなくとも古典の慣用句かと思う。

「太平記・巻五、大塔宮熊野落」にも「びんづら結ふたる童子一人」うんぬんとあり、近松にもある。髪型については自信がない。禿であることはいうまでもない。

岡田 諸説に尽く。禿の髪型は「びんづら」ではない。ただ前引の文例に倣って洒落ただけ。

水煙抄

正本水客選

大阪市 村上 田鶴子

風の音冬に構えているレール
遠くから遠くからなる冬の波
落し蓋騙して騙して豆を煮る
髭を剃る父とおなじ形して
臍の緒がカラカラ鳴るよ亡母の鈴
胴上げでほうり出されている不安

京都市 松川 芳子

花道のない人生にある平和
聞えてる様で返事はとぼけとく
奔放に生きて淋しさ溜めている
紙袋持てば土産に見える孫
しんがりを歩いて温い目に出逢い
魚屋の側を野良猫よく走り

八尾市 高杉 千歩

二ん月の我が家の鬼は不器用な
故里恋し二ん月の瀬戸内海

無職元年組板も新しく

グウチヨキバア空の財布でよろしいか
貰うては使いきれない祝箸

西宮市 妹尾 春江

独り居の贅九谷の茶碗と能登の箸
平凡な暮しをゆるする計が続き
いち枚の枯葉のように伯母が逝く
十二月の騒音の中で独り居る
日向ぼこ犬もゆっくり腰おろす

高槻市 竹内 花代子

いろいろな護符が揺れてる自家用車
伊達巻の感触ヒツプもう忘れ
落葉掃くほうきの下の芽が燃える
定退へ何度見て来た四季の花
干柿のすだれ大和は冬に入る

ベシ持つと自由の翼はえてくる
尼崎市 奥山 美智子

音沙汰が絶えて落葉をはいている
はりつめた心ほぐれて日向ぼこ
寒月が冴えて思いが深くなる
山陰に温泉宿の見え隠れ

今治市

矢野佳雲

無口だと思われている保身術
冗談だハハハと本音呑みくだし
恐い時相手も恐いなと思う
働いた夢をみている冬の蟻
うっかりと生きて保険の満期が来

尼崎市

中谷利美

監督のひとり角力に似たサイン
注いだ真似飲んだふりしてご返杯
後家相でないらし妻のうすい眉
左遷地も楽しからずや酒どころ
味覚ぼけ病院食に馴れた舌

鳥根県

東原福子

蝶も出て小春の窓の陽に溶ける
余りにも重たい過去が邪魔になり
振り向いたとたんに背筋が凍り付く
疲れたらカタコト独りの部屋に座す
何の灯か窓がうっすら明るい夜

羽曳野市

麻野幽玄

原因を第三者から指摘され
降りて来た崖どう登ろうダムの釣

五割引きする店その時だけ覗き
飲ませたくない酒が又届く暮
気晴らしに行つて来ますとバスポート

西条市

片土明水

気まぐれにした訳でなし途中下車
美しい花に香りが欠けている
言い過ぎた言葉をひよいとひとりごと
美しい恋でしたとは片思い
女房の財布も今日は銭がなし

今治市

渡辺南奉

善人が善人ぶるとビエロめく
俵せの鐘に撞木が付いてない
子に風邪を移したお人好しの父
友情のヒビそのたびに酒がいる
神様へ詫びライターで灯をともし

弘前市

田中叶

風聞く夜妻はかわりなく眠る
初雪に売りに出したる家があり
牡丹雪となりの明かりとともに降り
しかしよく降る雪嫁のことになり
消防車現場で飛車が成ることし

唐津市

浜本義美

番犬を自認しているよな長女
こんな娘が嫁にくればと思う父
Uターンさせて適職見つからず

猫にだけ鈴をつけてと犬が妬き
灯油缶だして師走の音を聞く

大阪市 朝倉利義

赤い羽根胸がチョッピリ温かい
還暦を過ぎて無性に亡母恋し

ポックリと逝かれて看病したかった

今日もまた生きた証に日記書く

赤字など国にまかせたボーナス日

大阪市 横井富久子

母と行く故郷に無人駅がふえ

宛先を二度も三度も言うラジオ

長生きをしてねと母の寝顔みる

旅先で生命保険をすすめられ

ポインセチア今年も赤くならぬまま

大阪市 塩田新一郎

お互いの命見つめて老夫婦

まだ生きて時々犠打も打ってます

冬蜂よ僕もまだまだ生きている

菊作り炎えし命の果の事

大阪市 清水康恵

宅急便一足早いお正月

青春の真只中にいる娘

淋しさに鏡をちよつとのぞきこみ

青森市 工藤路子

集金屋当り障りのない返事

成功よりも失敗談を子に教え

白鳥のくる川が好き町が好き

茶筌持つ雪の崩れる音のして

大阪市 津山刀水

新しい日記へ悲しい文字である

子供らにうるさがられている期待

荒波を乗り切る呼吸ととのえる

餅つきへ夫婦が夫婦らしくなる

富山県 舟渡杏花

ひもじい日こころの足しに本あさる

行きずりのドラマを生んだ旅の雨

底抜けの脆さを財布知っており

ひと様の毛皮を撫でて女です

寝屋川市 稲葉好子

老いの坂勝算のないお人好し

投げられたサイコロに何が出ようと

女には考える時間与えない

白秋も食べたであろう柿をむく

大洲市 米沢暁明

母の目が何故か危なく見える日も

逢う人のもう無くなった丘に佇つ

引き受けちゃ駄目よ電話の先廻り

今治市 八塚三五島

胸にバラ付けると別の椅子が待ち
次々と嫁がれて夜の長いこと

石手寺や無縁の人と語り合い
個性美を生かす知性の美しさ

竹原市 古田 比呂子

ぼたん雪むかしむかしを懐しむ

午前一時姑の咳こむ声をきく

すてぜりふとは哀しきひびき

サンタクロースきつと来るよと寝かしつけ

鳥取県 和井 観洋

天引の話に木枯し強くなる

深々と降る雪あや取りまだ続く

風船が一つはじけて瞳がさめる

窓ガラス洗う手順どうり暮れ

大阪市 田 渕 晴子

長らえて幸せ願ういのちかな

思ひ出や七つ鉦は帰らず

かくしやくと生きたし命尽きるまで

静けさや山茶花白き寺の苑

尼崎市 丹 下 玉子

絶筆となった賀状の整理する

喝采を期待しているニールック

絆絶つように秋風吹きぬける

喝采のピエロの素顔の無表情

尼崎市 西 村 かすみ

人が住む灯り夜汽車の窓に消え
道楽が本職となり旅にいる

ここだけの話私も聞いている

せめてものの強がり笑顔の負けいくさ

大阪市 西 村 芙佐女

ひっそりと表札古く同じ名で

おしゃべりのテンポでわかる暮し向き

その人は綺麗な歯ですと娘の便り

三日月は寒いよアベック肩を抱く

熊本市 高 野 宵草

一人居の蜜柑を食べて寒くなり

なじられてなるほど僕はお人好し

失敗でチヨイチヨイ示す人間味

距離置いてみるから女美しい

長崎県 岩 崎 和子

この一年なにをしたのか置き去られ

それとなく頼にさわるが聞いておく

身の程を知っているから腹が立ち

満腹になればテレビに向きを変え

堺市 久 井 富子

夢の中母はわたしを攻めもせず

夫の夢一度も見ずに忌が巡る

目がさめて記憶をたどり夢を追う

無気力な日々夢だけは旺盛で

西宮市 朝 山 千世子

落葉舞う甘酒茶屋は時雨する
除夜の鐘心に滲みる句が生まれ
子を起こす声が尖った寒波の日
他人ごとにボーナスを聞く寡婦の暮れ

鳥取市 武田帆雀

よい話ないかとこれが挨拶で
親の子で祭が好きは暴れ振り
日曜は大根抜く日と決めてあり
保険屋の足が乱れている日暮れ

大阪市 泉田そとえ

野地蔵に誰が着せたか赤頭布
年賀状ポストに入れて春を待つ
真白い雲元旦の旗ゆるる
実ばかりの柿の木になり冬深む

岡山市 原田凡太郎

新妻と初日おろがむ船世帯
年頭の決意笑われそうで止め
雪が降る降るご先祖様と寝正月
妻も来て賀状一枚ずつめくり

和歌山市 細川稚代

言える事言えない事を知って秋
マネキンも着ぶくれているフアッショ
ン
のび切った顔が二つの倦怠期
慌てない終着駅の灯もみえる

富田林市 藤田泰子

地の熱を吸い上げて咲く紅い花
会うことにおののきのある寒椿
大木によりかかりたし淋しい日
ちぎれ雲寄って大きな夢となる

鳥取県 羽津川公乃

誕生日いきなり赤いバラをくれ
追いついたそこから先は思案中
ほくほくの石焼芋と雨宿り
いつかばったり縁談遠のき派手になる

旭川市 朝倉大柏

握手した日から謀反の策を練り
出世したいのがいて大部屋まとまらず
親馬鹿と言われる親は有難い
平凡に飯を炊いてる幸がある

竹原市 古田鈍舟

木枯しへ気骨を見せた柿一つ
満をじしてじっとこらえた胃の痛み
酔眼にどんな地獄が見えますか
寒空を飛んだら心晴れるかも

鳥根県 藤原鈴江

コップ酒ある時おんなまねてみる
愛された仔猫うっかり爪を研ぎ
呆然と若さに押されてばかりいる
破れ障子が冬を伝える音で鳴る

大阪市 日阪秋子

なんとなき会釈で朝のつれとなり

楯にする口実一つにしがみつ

まだ元氣死ぬ日を軽く口にする

嘲つたらあれが流行と教えられ

鳥取県

加藤 茶人

酒が好き日本が好き四季がある

子を庇う言葉私を見失う

切り捨てに大上段の多数決

名古屋市

越村 枯梢

掌にまだ生きている落ち椿

薬包紙の鶴は千羽を超えている

藁草履の感触に酔う土ふまず

島根県

星野 侑正

クラクション鳴らしてうさの晴れぬまま

手順などいらぬ引金引けばよし

ヒット曲僕には歌詞がわかりかね

倉吉市

今村 夕路

この医者もいつも自分の舌を見る

人生も終りと木の葉散って見せ

生花は当座は水でしゃんとする

青森県

波 ただお

重そうに雪を載せてるツバキの葉

テレビでは豊漁というサケの切り身

障子張り替えて心も入れかえる

大阪市

鍛原 千里

枯れ果てた涙へ海が見たくなり

柿の実を色紙に書いて冬が来る

それぞれの夢を抱いてくじの列

西宮市

紀市 郁栄

隠しだてしない男も敵がいる

しあわせのひとつに綺麗な字が書ける

父の像かかげる釘はしゃんと打つ

岡山市

石黒 若恵

雪だるまどこやら孫に似ておかし

背伸びした嫁の土産が気に入らず

冬木立手を差し上げて春を呼ぶ

兵庫県

森脇 和子

思い出し笑いを笑う女客

栗はぜる音へおどける老夫婦

御無沙汰を詫び合う受話器へ声はずむ

東大阪市

高木 コハギ

初ぶろでいつもの顔にごあいさつ

かすみ草の苗をもらって春を待つ

旅行まで家庭のぐちをもつて来る

交野市

山本 テルミ

ゆずられた席降りるまで気が重い

幸せな毎日で仏間の灯が赤い

敷居まで歩いて人形ネジが切れ

大阪市

橋元 美恵

わすれもの取りに来そうな海のむこう

晩酌はほころび繕う妻と居て
行く道が見えて命を慈しむ

唐津市

田口虹汀

音がせぬようになったと思や雪
賀状書く 妻はおせちの重を盛る
命有る限り鳴きたい虫の意地

兵庫県

円増貞子

どたん場で答えるだけの腹は出来
間違いの電話一と声詫びてきれ
どしゃ降りのスクールバスへ母の傘

松原市

本多洋子

新年へ又指揮棒を振り直す
余程くやしいらしい批判ばかりする
指相撲父は小さい指に負け

兵庫県

奥野テル

石投げて池の波紋に話しかけ
島つむぎ形見分け着る齡になり
又今日も孫は輪の中鬼の役

島根県

福岡芳枝

余生こそ私の彩で生きたくて
ポケットに穴とは知らず尻尾入れ
何事もなかったしあわせシャボン玉

熊本市

北川一進

早起きの散歩何時もの顔が寄り
駅弁を一つ余分に買う夜行

退職をしてから知った街の色

唐津市

久保正敏

事勿れ主義は男の怠慢だ
お先棒かつげば強い風当り
粗大ゴミと言われぬために出す勇氣

大阪市

吐田公一

左遷地の水が合ったか太りだし
疑えばきりない信ずることにする
一言に隙間ができる冬の家

唐津市

木塚素石

コップ酒無口の衣脱いで捨て
月斗の碑太閤のごと韓望む
文化祭エプロンバザー雑踏す

羽曳野市

佐野白水

七回忌十三回忌に会う約束
自家用で行けるとこまで行くハイク
内向性夕暮れ近き紅葉好き

高知県

山崎広風

いつもとは違う視線の肩車
逃げ道を一つ作ってある余裕
冗談も余計白ける倦怠期

兵庫県

山崎忠夫

初孫で朝な夕なにカメラ向け
西日うけ鈴なりの柿過疎でこそ
取り壊す家に名残りの雪が舞う

一次会果てて戦線縮小し

切角の余命数えて趣味がない

顔馴染み誰か居そうな赤提灯

大阪市

大倉圭介

じりじりと冬近づいてくる雨しきり

それなりに自分に合ったことをして

まな板のリズムと合って雨の音

島根県

堀江百代

健やかさ友を見舞ってかみしめる

振りかえるゆとりを持たず年の暮れ

徹底した馬鹿にもなつて角見せず

鳴門市

八木芳水

分つてる嘘おしまいまで聞いてあげ

疲れだけ残りホテルのフルコース

新しいお鍋の煮物ことごとと

松原市

佐藤藤子

色々の眼鏡を掛けて世を渡る

物忘れなかなかしない老母が居る

年末を赤旗立てたままで越す

八尾市

山下みつる

大声で笑った夢で目を醒まし

気まぐれに可愛がられてなつく犬

どんぐりの逃げるに任す落葉掃き

高槻市

田崎あき子

どちらかが慌てもので馬が合い
見舞客テレビのドラマ見て帰る
一世帯ひっさげて来た病室も

(母入院)

風いっぱい法衣に入れて単車行く
意識して涙をかくすはしやぎ方
満月に門灯点滅して拗ねる

和歌山県
天満三千代

町暮し寸土余さずネギ植える
亡姉の部屋贈りし拙画掛けしまま
亡き人をほめちぎったり貶したり

泉佐野市
大工静子

このボクの休まぬ記録父に似る
がむしやらに働くボクもまたあわれ
惜しまれて去る日軍歌を口ずさむ

橿原市
西本保夫

流れ雲ふつと愚かな俺を見る

角隠しに妻が生きてる目鼻立ち

旅帰り妻の荒れ掌を酌で知る

札幌市
北村深星

どの石のどれも仏の貌になり
爪垢を取って女は爪切らず
ロケットで月へ帰ったかぐや姫

大阪市
平井露芳
(化野念仏寺)

トンネルをいくつ越えたか秋の山

岸和田市
吉水照江

舞い落ちる紅葉の色香おしまれる
ジングルベル鳴る雑踏を市場籠

鳥取県

石井雅水

尻尾振る犬にはならぬと賀状書く

歳末の雑踏縫うて車椅子

貯めて来た一円募金へはずむ音

豊中市

満仲きく子

定年が近い男へ十二月

まだそこで何をしている枯蟬

今日駄目ならあしたがあるさあさつても

和歌山県

串本すみ子

燈台に夜を預けて海眠る

写真には隠した心浮いている

傷心を澄んだ瞳にいやされる

米子市

足立由美子

限りなく深い心で子を育て

円満な家庭のカギは妻がもち

性格のまま直線の花を活け

島根県

松本はるみ

一言でとける氷としりながら

からたちの美しくありたい実をむすび

白菊の霜をまとうて残り咲き

米子市

寺沢みどり

腰据えて飲む晩酌の椅子きしむ

自惚れを断たれしみじみ知る弱さ

簪目を消した程度の雨上り

東広島市

坪島美津江

中途半端染しみながら老いの坂

千支の犬えらぶ夫は戌の年

長い橋渡りきるまで頑張ろう

尼崎市

矢萩貞子

お地藏さんに手を合わせてる子に出会う

石仏は冷たい水を浴びせられ

機械好き父親ゆずりの手つきして

諫早市

江副二牛

国と国のはざまに孤児は忘れられ

金婚式新婚の宿まだ覚え

小袋が絵にふる祖母の寺詣り

兵庫県

野々口ゆう也

朝の音かぜで寝ていたはずの妻

嫌なやつ肩這う蟻を言うたげず

念仏の木魚の音に邪念ふと

大阪市

野田君枝

カレンダー暮れへ向ってひた走り

普段着で孫と写した七五三

仕事して趣味もあれこれして感謝

新潟県

高野不二

米が余る米が余るとにくい事

栄養の本にもやせる記事があり

時代おくれか紅白の歌がわからない

米子市

野坂なみ

のんびりと暮らしひとりの翳見せず
さっぱりと別れ他人となる恐さ

岡山県

松本元江

向い風受ける強さを教えられ

気に入らぬ言葉互いに吐き合うて

確信を持てばあしたの虹が見え

岡山県

吉末謹太郎

知り切っている裏道が歩けない

偽りを飾る言葉と知って聞く

損のない会合だけは顔を出す

大阪市

板東倫子

みどり児のにぎりこぶしに生命みる

マンションの鉢に小さな松根付く

ペランダに蝶ひとつ舞う色褪せて

大阪市

大野武太

義理のある人で見舞も妻といく

代書屋のような仕事をまかされる

半分の権利実印妻も持つ

堺市

田辺哲寿

陸橋をすぐ作らせた死亡事故

自分だけの世界に居るウォークマン

胃カメラのように深海二〇〇〇行く

八尾市

宮崎シマ子

寡婦となり姉はどつかと腰を据え

野良犬は抱かれたチンをさげすみて

山茶花の花まき散らす猫の恋

大阪府 林 ひろ子

雪の降るテレビのむこうを羨む娘

主の無い布団寒々朝を待つ

冬寺にぼつりと立って我を見る

赤とんぼ幼きころの夢はこぶ

緋鹿の子の桃割れ姿に父母見惚れ

夕焼はいのちの燃ゆる思いして

木枯しが落葉の舞を見せてくれ

底冷えを歩く二人の肩がより

苦しみは人に語らず吾れが摘む

一ト筋の矢となりトンビ飛びかかり

芽を摘まれ手足をきられ松すねる

耐えて来た半生時世が押し戻し

年金の入った月は笑い合い

紅のあと風雪耐えて磨崖仏

ゆうらりと浮世はなれて舟下り

幸せな余生日めくり指を折り

一人居て大声で唄う思いつきり

幸せを味わう頃は先が見え

よたよたと頑張ってます夫婦独楽

郡山市

岡田すみれ

尼崎市

中辻千子

境港市

細木歳栄

八尾市

葛幸子

島根県

岩佐富子

唐津市

山下勝一

平凡が幸せと知る年の暮

大阪府

権安達一郎

つたかずら其の儘にして夏の家

寝屋川市

立床晴風

幽応えのある論争の盾になる

木鉢に任せて愚痴のない庭木

唐津市

仁部四郎

御意見は尊重しますと却下され

今日はまだ人生相談読むゆとり

西宮市

林はつ絵

あざやかな切れ味のままだいってゆく

集ると自髪は急に活気づく

西宮市

松尾志保

たそがれの落日赤し人恋し

赤電話かけてるあの子の笑顔よし

大阪府

村島秀村

秋の野の花に淋しき色をみる

もう八十路夫婦でいのちかばい合う

唐津市

桑原掬治

シベリヤの零下を語る老眼鏡

百舌鳥の声崖のもみじが谷に散る

吹田市

西岡豊

湯どうふをあてに始まる冬の酒

割勘で飲むコーヒーが温かい

奈良県

宮川古都路

精一杯いばる心の空しさに

免税店ギリギリのドル使い捨て

唐津市

浜本久仁於

三カ日めでたくめでたく飲み潰れ

末席は坐っておればよい会議

兵庫県

伊沢午郎

エブロンをかけててよかった隠し場所

最終のランナー私に決められる

八尾市

松下蕉露

家事調停愚痴話から聴いてやる

あの時の相棒名簿で死んでいる

岡山県

池田半仙

胃を切った話を胃痛聞いている

根は春を用意している冬木立

浜田市

佐々木裕

月並みな言葉の裏に棘を秘め

ポーズにも嫁ぎおくれたカメラ馴れ

高知県

曾我部つぎお

献血へ四十五キロを考える

男性のくせにお齡をひたかくし

島根県

岩田三和

右角に寄って王将金を呼び

酒のます手早い母のドジョウ汁

尾鷲市

渡辺伊津志

針のない時計していて良く嫁ぎ

ゴツゴツとした鉢に合う柳の葉

米子市

田中亜弥

手相見が栄えることをほのめかし
疲れてる夫の無口に逆らわぬ

泉佐野市

真崎浪速子

己が髪言わず恩師の白い髪
十二月八日もう欺されまいぞ

山口県

高崎喜一

風だけが通りぬけてる無人駅
もう偉くなれない年齢をとり過ぎた

吹田市

西川景子

珍しい苗字ルーツは同じ村
送別会嬉し妻の私まで

大和高田市

岸本豊平次

育児書がたった一人をもてあまし
日記にも書けないことは忘れない

東大阪市

三宅哲夫

この道は楠公ゆかりの千早道
人に酸素みんな吸われて我ねむし

八尾市

椎尾公子

聞き馴れた夫の足音鍋をかけ
雨に発ち雨で帰った古都巡り

八戸市

島田昭治

落ちリンゴ何も言わずになでてやり
一茶真似知らぬ雀に餌をやり

東予市

小山悠泉

値上りへブランが狂うマイホーム
植樹祭緑がしげる日と思う

幸せはお腹で心がねむるとき
球根を植えたと小犬に言い聞かせ

和泉市

岡井やすお

ニセ名器二千万円保障つき
大晦日ヤングがそばを食べている

(前月号分)

堺市

久井富子

意地悪をされてる孫を只眺め
守り忘れおとな同志で花が咲く

唐津市

田中紫浪

松の枝切れば自棄のヤニを出し
猪鍋の季節霧氷も見たくなり

今治市

新居田胡頼子

片減りの靴捨てがたい身障者
忘れたいことも一緒に煤払い

大阪市

服部頼一

もう五年まだ使えます赤い羽根
国旗出す律義正せばへそ曲り

大阪市

山根いつを

荒海に育って風がもの足らぬ
赤い布吊して豆腐屋呼ぶ合図

大阪市

山脇正之

若い頃アカと呼ばれた思い出が

大阪市

山本炉齊

銭湯で屈伸運動のお父ちゃん

大阪市

堀口欣一

兵庫県 藤原捷一

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自 56年 9月号
至 56年 12月号

路郎賞候補作品

若 本

多久志

(到着順)

母が居て誰はばからぬ男客
愚かなる者がつくつた核兵器
狂い出せば火の輪ともなる念珠の輪
工藤 甲吉

小出 智子

柏手の冴える朝なり今日がある
御身ぬぐい大仏様のお手に乗る
ひと掴みの髪之母とはなり給う
高橋 操子

鈴木村 諷子

平凡な石で蹴られた方へ向く
振り出しへ素直に齡が戻れない
病院の窓しみじみと昼の月
野田素身郎

天正 千梢

老いゆかば形ちなきものはしくなり

水粉 千翁

心画く筆に私を犯されず

悠々自適 一つ死んでもが云える幸

無の境をさまよわせてる秋夜長
まだ騒ぐ血があり秋の径
河村 日満
和田維久子
岩田 美代

正 本

水 客

飲み足って寝足って孫の笑い顔
歯車になれと個性が削られる

川崎 秋女
安平次弘道

百羅漢 峠の道はよく曲り

黒川 紫香
藤井二三

祇園ばやし京の男の玉の汗
とり込んでいるとは夫婦喧嘩なり

野呂 鶴汀

欲を言えばと欲の深い事ばかり
ゆでられて貫禄の出る蛸の顔

島崎富志子

大連れて思わぬ近い道を知り
坐り込みついでに坐禅などいかが

清野 こう
木村はじめ

前例を三調べておくゆとり

工藤 甲吉

流灯もやっぱり岸へ寄りたがる
活けられて向日葵向く方考える

長野 文庫
高橋千万里

片付かぬ事のみ余生流れゆく
勝ったなと思うところで妥協する

谷 真風

硝子戸を這ってとかげは腹を見せ

榎本 吐来

会う場所は少しキザだが紀伊国屋

園山多賀子

若 柳 潮 花

かんなくす隣の庭にとんでゆく
清水 健司

一十一 三になりそうで式を挙げ

棚いつぱい人形が笑っている不気味
黒川 紫香

材木を並べて横になる大工

千発の花火を見てもふっ切れぬ
都倉 求芽

もう秋か酒の美味さが舌にのる
清水 健司

慌てたら邪魔するだけの手が慌て
谷垣 史好

玄関も勝手も靴 靴 夏休み
堀江 正朗

辞書をくる生活は金に背を向ける
福本 英子

ちんまりと柩に入り易く老い
高杉 鬼遊

ひらめいた案も自嘲へ閉じこめる
工藤 甲吉

干し草の匂い牛飼う手の匂い
堀江 芳子

ト音記号安易な音は連れてない
上田 翠光

よろこびが走る片ちんばの下駄で
八木 千代

常日頃阿呆で居るから世話が出来
水粉 千翁

蟻の列どんくさいのが矢張りいる
児島与呂志

西尾 栄

古野 ひで

紋白蝶つかず離れず夫婦かな
通り魔も辻斬りも出て文化都市
骨蒸しの骨まで愛す舌づつみ
作業衣の下に一捺の血が流れ
好きでない方の女とつちとける
降ってきたよろこび話が前後する

職安へ辞表のいきさつまで喋り
石蹴ってまだ興奮の余韻抱く
婦人科へ行った女の立話
円いコップに注いで円い水のみ
鈴木村諷子

会う場所は少しキザだが紀伊国屋

松茸は贈収賄になる値段
逢うもよし別れるもよし京くれ
なんとなくライバル意識の世辞をさく
林 瑞枝

成長の過程だからと甘やかす

橘 高 薫 風

西山 幸

バカンスも出稼ぎも持つ紙袋
弁護士は別な心で聞いている
萩桔梗むらさき精霊慰われよ
人妻になつても君の稚い字
御身ぬぐい大仏様のお手に乗る
高橋 操子

ゴキブリが居ても叩かぬ盗み酒
少しずつ妥協をしている三角形
それでも水を満して欲し欠けた甕
原 独仙

稲光り遠く戦う国がある

八木 千代

始末書へ親切そうに椅子をくれ
花ほどに綺麗な正座してみたい
実印のごとく孤高を守る父
屑籠に未遂の罪の二つ三つ
土足のまま上るが如きインタビュー
杉浦婦美子

川柳塔賞候補作品

黒川 紫 香

尼 緑之助

レモンティ素適なひとと海を見る
アルミ貨が路傍の雨にたたかれる
ひっそりと枇杷のなる木の長い堀
工藤 落子

気が向けば男とことん掃除をし
適当にちらかっているあたたかさ
奥山美智子

いそがしい一日だった手の輪ゴム

細川 稚代

不発弾溜めて娘の里帰り
右手病んで左手使えぬもどかしさ

北浦 牧郎
山崎 広風
丹下 玉子

雑談の合い間にきつちり飲む薬
売れない店へ西日が強すぎる
飲まず気も飲む気もないが買うワイン
中田 白李
西村かすみ

見つけたリテラポットに白い秋

満仲きく子

お好みが好きで孤独に耐えられず

高杉 千歩

土砂降りの中で男の嘘を聞く
箒目に紅葉散らして驟雨ゆく

津山 刀水

香川 酔々

この城に生きたあかしの石の苔
ゆく秋へうろ覚えなる詩を捧げ
柿の葉のしぶいロマンをあの人と
松本はるみ
高杉 千歩

知りすぎた女某日それっきり

野々口ゆう也

大根の真直ぐ伸びたのを選ぶ
陽炎の中からゆがんだ電車くる

稲葉 好子

謎を解く鍵が怖くて差し込めぬ
どうにでもなれと鳳仙花が弾け

白石 潔

思考ゼロただ編針が動くのみ
露はみな宝石となるかきつばた

有働 芳仙

昼寝から覚めてもひとり蚊のゆくえ
彩緋せた日傘が悔いを一つ持つ

稲本 凡子

扇風機どちら様へも顔をたて
時を待つ朱子の哲学読みかえし

本多 洋子

ふるさとの蟬が受話器の中で鳴き

北浦 牧郎

村上田鶴子

宮崎シマ子

古田 純舟

原田凡太郎

高杉 鬼遊

津山 刀水

夫の指九本までは信じてる

村上鶴子

人生はどこかに抜ける穴がある

岸本豊次

重荷なら夫婦で少し軽くする

清水 康恵

しみじみときき友のありトマトつれ

堀江 百代

扇風機どちら様へも顔をたて

宮崎 シマ子

無駄だとは思えど千羽の鶴を折る

佐藤 藤子

鈴が鳴りまた神様が呼び出され

田辺 哲寿

ササニシキ米にもちゃんと顔がある

奥山美智子

柳友の誼み

鈴木村 諷子

社会的地位、資力、職業、生活環境或は年齢も、男女もすべてそんなものはぬきにして一却って問わない方がいい。ただ川柳という趣味の上で柳友としての誼みを交す何とたのしい面白い世界だと思われてなりません。中には柳人名簿に市議会議員などと肩書の乗っているのを見かけるが、川柳と議員に何の関わりがあるんだと苦々しく

そうですか善人ですか短気者

仁部 四郎

八月の帯逢えないときつくなる

稲葉 好子

海なんか死ぬもんですか さだまさし

満仲きく子

言いきればはらはら消える風の彩

田増 貞子

悲しみの数だけ拾う貝のから

古田比呂子

土砂降りの中で男の嘘をきく

津山 刀水

別れから女おんなをとりのもとし

吐田 公一

気が向けば男とことん掃除をし

羽津川公乃

爽竹桃咲いて学生昼帰る

久保 楨三

雑草とわかつたところで引き抜かれ

古田比呂子

谷垣 史好

思ふこともある。

古田比呂子

鳥取でのある句会で、会場にはいって席に着くと栗先生ズイと来られて、ムズとこ

ついで私の手を握って下さったあの感激は忘れず、あれからずっと胸に温めつづけています。

郷土の先輩・森田茗人氏がよく言っておられた

同人ってそんな生つちよろいものじゃないんだよ

ほんにそうだと沁々思う。

毎月の川柳塔誌を開くとズラツと面識こそないが、もう百年の知己、何回も何回も

読み返す。そして柳友の誼みに触れる。そんな時は愉しき一杯です。永い間の句とのつきあいに、その人の句風まで感じ取れるような気がする。よく川柳の大会などで、初対面の人に出逢うことがある。胸のネー

ムを見てあの人が誰々さんか、なつかしさに駆け寄って名乗ってもみたい衝動にかられる時がある。

お互い肩書や地位、金力そんなものはあつさりとは抜きにして、自分の精一杯の力を注いでいい句を作り、句の上で睦み合いたいものです。

枳ふだをかけて柳友句で睦み

村諷子

咳払いそれも男の価値のうち

日阪 秋子

いそがしい一日だった手の輪ゴム

久保 正敏

しみじみときき友のありトマトつれ

堀江 百代

真白いシート本気になりたがる

中田 白李

どうにでもなれと鳳仙花が弾け

有働 芳仙

切つ先が喉元に来る北の国

山下 登舟

ゆく秋へうろ覚えなる詩を捧げ

高杉 千歩

堂々と女ひうりを表れに

野々口ゆう也

点数を稼ぐ尻尾がちぎれそう

津山 刀水

堕ちてゆく私にすうつと蜘蛛の糸

古田比呂子

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

櫻谷 寿馬

今回は句の中の一つの言葉を中心に見させて頂くことにします。新しく掘り出した言葉推敲を重ねた言葉、ふと頭に浮んだすばらしい言葉、なんでもないようで、読む人に感銘をあたえる言葉……そんな一ことが句の他の不足を補って余りあるものになっている。そういう句を味わって頂きました。

(一) 見付け出された言葉

野の花の埋もれて咲くを摘み残し

高杉 千歩
背を向けたまんまで嘘を組んでみる
野々口ゆう也

絵日記に祭太鼓の音もかく

中田 白李
嬉しさは顔から先にしゃべり出し
足立由美子

カーテンを引いて女の窓が開く

和井 観洋

逢いに行く罪のしずくに濡れながら

浜口 秀子

言葉というものはむやみに創り出すべきものではない。さりとて常用漢字のような窮屈な思いをさせては可哀そうである。「埋れて咲く」と五字に締めねばならない苦しみを経「嘘を組む」という魔術を使い、罪を「しずく」と見る夫々の人の心こそ新しい言葉を産む力と苦悩と、開花の喜びがある。

(二) なんでもないような佳い言葉

エプロンが似合わぬままの人である

村上田 鶴子

つるし柿するりと風がぬけてくる

古田比呂子

年賀状元氣な声が弾けそう

奥山美智子

鬼を打つ豆入念に煎っている

田口 虹汀

筋だけでは小説にならぬ。まして格調のある作品には、使い馴れた言葉も、在り方、タイミングによって文学性が生まれ、また俗性にも落ちる。口語体と仮名との結びつきが特に川柳には大切と思われる。年賀の文字が弾け鬼の豆を入念に煎るという普通の言葉も一句全体の中では生きた人間がそこにある。

(三) 推敲が生んだ努力の言葉

男にも同じ音する洗濯機

竹内花代子

もう半歩出ると叩かれそうな杭

片上 明水

祭笛こにくい雨に掻き消され

田中 亜弥
母老いて童話のような国に住む
佐々木 裕

秋惜しむ涙のように散る枯葉

堀江 百代

案外、作者は容易く詠まれたかも知れませんが、私にとっては随分考えられたあとがあるように見えます。努力の結晶の輝きが。

(四) 平易だが広がりのある言葉

初雪の便りに柚子湯誘われる

工藤 落子

ブランコが素直にゆれる空の青

岩崎 和子

幸せは嫁とくだけで笑える日

奥野 テル

ドラマを持った言葉とはこんなものではないでしょうか。これは作句されようとされる以前に、既に心の中に一つのドラマが構成されているからでしょう。こんなひとことが流れ出ざるを得ない一句こそ、人間の詩と言えるのではないのでしょうか。

最後に前文とはかわりなく、水煙抄に新しい風を誘ってくれると筆者が感じた秀句を選ばせて頂きました。

刺し子縫う紅の糸なら啞になる

高杉 千歩

鮭豊魚ただそれだけの事で済み

松川 芳子

まだたりぬように後ろを振りかえり

古田 鈍舟

句評リレー

大矢 十郎

高杉 鬼遊

藤井 明朗

本田 恵二郎

やじろべえ傾きすぎたままに秋

八木 千代

十郎―バランスを保ってこそ愛されるやじろべえ、そのやじろべえが大きく傾いたままに手を掛けてやることも出来ずに秋が来たことを淋しく振り返るひと時である。

鬼遊―自然の移ろいに対応できない者への諷刺だろう。『秋』はその者たちへの哀しみとみたい。

明朗―いつか忘れられていた時、ふと気づ

いた折も折、そぞろ空を流れる風に秋を知る一抹のわびしさにもじみ出てくる。座五に『秋』を置いて非凡である。

恵二郎―やじろべえは傾いてはならぬように運命づけられているのだが、遂に傾かざるを得ない状態となったということは、精神的おとろえとか、肉体的老化とかを想わせる。秋とはうらさびしさを描写する語であろう。

十郎―正面から此の句に取組んで見たが、このやじろべえからは人間臭さは感じられなかった。四人の眼が横から斜からそして後ろからスポットを当てている。本当の姿は読者の感覚によって異なるものである。

鬼遊―やじろべえは矢張り人間だと思ふ。

恵二郎氏の評から連想するに、管理社会における一人間像でなければ川柳にならない。どうにもならないやじろべえ（人間）の哀しみを通しての批判句とみたい。

明朗―恵二郎氏の評を適切と見たい。生活の中に自分のおとろえを託して句の中に人間のきびしさを迷懷している。

恵二郎―人間臭を感じないと感じるのに分れたから面白くなった。その審判は柳友諸兄姉にやって頂けば一層面白くなるぞと私は期待の胸をふくらませている。

良心が覗くとコーヒーぬるくなる

岩田 美代

十郎―良心的になった時コーヒーが美味くなるのであって、その時の心の持ち方一つでコーヒーの温度にかかわりなく口に優しいものである。此の句の場合、いさかいの後のひとときであろうか。

鬼遊―コーヒー好きな作者だけに、特別な思い入れがあるように想像してみたが、わからない。下五『ぬるくなる』は時間的な経過と思つたが、そうでなく心のおだやかさかも

知れない。

明朗——憩いの中のコーヒーは一時の安らぎを覚えるものだが、この句の場合そこに相對する人物が浮ぶ。語らいのあとの情景が描出されて余情がある。

惠二郎——やや警戒しながらの對座であり、對話であつたのが或る時点で互いに良き心を覗き覗かれ合つて、對話が明朗になり、舌の廻転がスムーズになつて意氣投合である。コーヒーの存在は無視されてしまつた。

十郎——良心が覗く迄に多少の時間の経過もあり、現実にはコーヒーはぬるくなつてゐる。

停電で音半分の静かさに

堀江正朗

十郎——作者は盲目と承る。読んで字の如き句なれど到底私達目明きという恵まれた者にとつては停電で視力を失なつた不自由さこそあれ、音が半減したことには気付かぬであらう。にじみ出たようなこの句から学びとりたものがある。

鬼遊——「音半分」とは言いえて妙。作者の

良心が覗くが非凡な川柳性かも知れぬ。

鬼遊——この作者の句にしては物足りない。深読みするほど、この句に思いがあるだらうか。抽出した編集者に何か仕掛がありそうに思える。

明朗——この句、ひとそれぞれの思いがする楽しさ、重苦しさ。良心が覗く。でほつとしたコーヒーのぬるさも心よいしげきとなつた。

惠二郎——あまりむつかしく解釈すると句主は心外とするかも知れぬ。軽ろやかに、ほのぼのと感じ取つてあげた方がよさそつたな。

心眼でこそ捉えられる世界である。

明朗——作者の句は微妙さがあつて独特のふんい氣を描く。音半分とはうまい表現、ぴしつと的を得て余情がある。

惠二郎——盲目である正朗君の影となり、日向となつて、ひねもす行動されている芳子さんは文字通りのベターハーフである。停電というハブニングによつてベターハーフの行動音は一時停止せざるを得なくなつた。それを音半分と描写したのだと私は解釈したい。

十郎——この句、音半分に大方の感動が集中したのではつとした。

鬼遊——大きく感じる句である。読者それぞれ

れの思いをすべて吞み込む広さをもつた佳句である。

明朗——事象をうまく表現され句には敬意を表している。一しゅんの感情をとらえ、一つの句の世界を見出す人を感動に誘う句、鬼遊氏の評に同感である。

惠二郎——音半分という語句にみんな魅力と興味とを感じたようである。正朗君と芳子さんとが会心の笑みをこぼしている図が目に見えて来る私である。ますますご健吟あれ。

姫だるまお前のようにまだなれぬ

小出智子

十郎——いい着物着てふくよかな姫だるまつて結構なご身分ですね。貯えも沢山あるのでしよう。何もしなくても良いふところ手が又羨ましい。智子さんもう少しのご辛抱です。ご精進の程を。

鬼遊——私は心的な句と理解する。「まだなれぬ」を願望と見るより、「ならない」「自我を感じなくては、評価が半減するのではなからうか。」

明朗——智子さんの句には引かれるものがある。

る。女の心理を描いてさらりと言いついて妙。

恵二朗—鬼遊君の説に同調する。まだまだ達磨になってはならない。五体をフルに動かして精一杯に働き抜こうという前向きなフアイトが感じとれる。

十郎—働き通して来た人の希望は「お前のようにまだなれぬ」の中に、早くになりたいという待ち遠しさを感じた。横着な見解かも知れぬが。

鬼遊—「まだなれぬ」下五に、凝縮された

信号が青になると隙が出る

安平次 弘 道

十郎—信号は道路交通のみならず広範囲にわたって引用されている。例えば診察、業績、学力等に於いてすべて当てはまる句ではある。然しこれらの場合は明らかに心の隙であるがこの句の場合は車間距離であらう。赤信号で隙間なく待機していた車が青信号で前車から徐々に進んで隙が出来、やがて元の車間距離となる。誰もが経験することである。

鬼遊—十郎氏の説にも一理あるが、これは

思いがある。この技法は作者の川柳に対する勉強の成果と思いたい。

明朗—やはりこの句は女性ならではの句、自分の生活をつめ一日一日の幸せを見つめ世相の中に「まだなれぬ」に秘めた心強さを表わして句感に心強くひびくものがある。

恵二朗—座五のたつた五文字で句の生死が決めることはみんな先刻の承知のことであるがさて軍配は—私は前述の言葉を繰返すより外はなさそうである。

あくまでこのころの隙である。作者の緻密な感性を見る。

明朗—十郎氏の評もつなずかれるが、人間の弱さを衝いた人生諷詠の句と見たい。

恵二朗—青信号は一種の安心感を湧かせるそれは油断ということにつながり易い。交通信号にことよせて、わが人生行路への自戒を述べたらしい。

十郎—この句、単純に交通信号と見たのが結局は考え過ぎだったのか、心の隙とすれば句評に動かぬ言葉が見当らなかった。

鬼遊—前句、智子さんの句で、恵二朗氏に同調してもらったからではないが、恵二朗氏の説が適切のようだ。

明朗—「信号の青」に人間生活がある。幸

せをつかむとふと心に隙が出る。待ちうけるもの黄信号へ人生の享楽の岐路がある、同感

恵二朗—それぞれの説を傾聴すると佳き勉強になるものである。教えられたり、教えたりの快感を抱かしめ合おうよ。

豚は豚なりのセンスをもつ童話

若 宮 武 雄

十郎—豚は豚なりにキャベツを食べて泥んこ遊びをし、ごろ寝をするのが好きである。猪のような粗暴さもなく鹿のような俊足もなく只々平和を望む童話。三匹の仔豚を思い出させる。豚への愛くるしいイメージを温めてゆくのも童話の使命である。

鬼遊—下五の「童話」に逃げがある。童話でなく、現実想定された方が「豚なりのセンス」が活性化されたのではなかったか。

明朗—子供の世界の童話も姿をかえてくるように思う。「センスを持つ」の語に救われている、その中に人生の童話が浮かぶ。

恵二朗—豚などといったが、何をかくそう人間さまのことである。童話がよい。童話でなくてはさしきわりがある。適切な語の発見

である。

十郎——人情家武雄さんの句に接して豚を豚野郎に置き変えることが出来ず素直に豚として抵抗もなく頷いたが？作者の心境は如何？

鬼遊——童話に逃げがあると言ったが、これは作者の愛であると訂正したい。すこし弱気かな。

明朗——からだの大きい割には豚はおとなしい弱さを宿命的にもっている。愛くるしさもふわり童話の中の自分をみつめての感情が描き出されていると思う。

恵二郎——さあわからなくなったぞという声が聞えて来そうになったようだ。そこに興趣がひそんでいるのだ。童話があるのだ。

喪服着ると余計明るくなる娘

都 倉 求 芽

十郎——喪服を着た時の女は一番美しいと言われている。娘が喪服を着る時それは大きな悲しみに包まれる時であろう。然しその悲しみを胸に秘めて礼儀正しくつつましく応対する姿は格段と美しく明るく映えるものである。中七の余計明るくが少し飛躍だが。

鬼遊——喪服は悲哀である。その哀感の中にあつても、女の性は美を意識するもののようである。「余計」は「想像以上に」の意だろう。喪服と女の取合せは今更という程度で、作者の思いがそれを超えられなかった。

明朗——喪服と女、哀感のたどよう魅力さえ感じる。喪服と娘、これは愁いの中のはかな明るさをふくんている。「余計」の語の外に言葉がないだろうか。

恵二郎——黒を着ると若さがぐんと引き立つ。それは娘だけではなく、たくましい若者の場合も同様だ。その黒がこの句の場合喪服である。悲しく、さびしい美を浮き彫りした。

十郎——男性から見た喪服の女性、それはあまり大差がないようである。

鬼遊——皆さんは、喪服の女性に大分参っているようだが、すこし甘いように思えてならない。

明朗——喪服と女、新しい着想とは言えないが、男性から見た感情の描出のようであるし女性から見た場合はどうであろうかとも思われ、その場の情景が諸々の感情となるのである。

恵二郎——余計明るくなるという描写が適切であるかどうか、あやしくなってきたな。私の説も陳腐の域を出ないものだと思えてきた。

同時に左程論するほどの句ではなさそうだと思えたりする。

さて、第一句から第七句までへあたたかい批評の目をそそいだ十郎君、鬼遊君、明朗君は揃いも揃って優れた川柳人であることは衆知の通りである。それぞれに忌憚なく述べられていることへ敬意を表したい。

評者も読者も共に句評の楽しさとむつかしさとはかくの如きものと知らされたり、知ったりしたことと思う。この楽しくむつかしいということの繰返しによって批評眼も鑑賞眼も向上してゆくものであり、同時に作句力の進歩の源泉ともなってくれるのだと私は思っている。計らずもリレーのアンカーを勤めさせて頂いたことへ恐縮しながら、私の力不足をおわびする次第である。

お知らせ

森中恵美子さん（NHK「老後をたのしく」川柳選評でお馴染み）が、二月四日（木）五日（金）午後二時からの女性手帳（NHKテレビ三十分番組）に出演「人間諷詠・女叫びます、女笑います」をテーマに対談される。

愛染帖

橘高薫風選

大阪市 小出智子
陸橋のいちばん星をふる里に
意気込みを聞いている雨が降っている

青森市 工藤甲吉
湯煙りの町にこけしの娘は生れ
ホーホーと啼いて鳩笛出来上がり

大阪市 西森花村
赤旗の赤日の丸の赤となり
空と言う気持がわかる宝くじ

朱子市 八木千代
積木つむどんでん返しのないように
息切れへ坂もくぼみを見せてくれ

高知市 西川富恵
冷たくされても過ぎし日の木のみどり
展けても無や如月の女の手

兵庫県 遠山可住
もう一度会えばわたしは恐くなり
来年に約束がある歳暮かな

堺市 高橋千万里
菊盛りいい季節に逝きはった
祖父逝って秘蔵の菊をもて余す

岡山県 原田凡太郎
金にさえなればゴキブリにも扮し
思い出の湯の町いつも灯が点り

島根県 堀江正朗
手さぐりで飲むには水が似合いそう
大の字に手足伸ばしてあきらめる

唐津市 新潟 回天子
横領何億女の恋がさせる
親子ですかと言われ妻ですとも言えず

島取県 林露杖
核論争埴輪の耳がきいている
銀行のカメラに向ってハイチーズ

富田林市 田形美津子
人妻になって女の文字を書く
無表情だからファッション生きてくる

大阪府 神夏磯道子
おうへいな構えと見てとれば老碌
負けそうな相手が水の底にいる

出雲市 石倉芙佐子
一腕をめぐって光と影が出来
終点のない電車には乗れなくて

富田林市 藤田泰子
五体意に逆うばかり古橋近し
反骨のひとりは父の名も知らず

鳥取市 河村日満
禁酒してきてそれからが鬼の口
岸和田市 島崎富志子

平田市 角耕草
途中から児が負ぶさった雪の跡
いのち綱少うし長くしてもらう

西宮市 林はつ絵
キリストを讀める神父天を指し
銀杏並木恋のこぼれておりそつな

島取県 鈴木村颯子
海燃える向う裸の国がある
素うどんの客が聞かせる処世術

尾山 宮尾あいき
エスカレーター尊徳めくが週刊誌
隅っこでおんなを生きたる面を打つ

和歌山 西山幸
独り善がりの熱き想いよ冬銀河
電話帳に名前が載っている不安

京都府 山本桐下
修身の見本よ父の三ヶ日
梅干をつぶして女姑心に耐え

島根県 堀江芳子
犬飼って犬には優しい女になり
愛すれば畏を掛けなくなる季節

唐津市 木塚素石
大阪府 坂口公子

ねんごろな握手手袋はめたまま

笠岡市 木山 遠二

岡山県 嘉数 兆代賀

面白し何時の世からか塗り初めし
高知県 山下 登舟

島根県 榊原 秀子

大阪府 北勝 美

田楽の並ぶ囲炉裏に母想つ
和歌山県 若宮 武雄

倉吉市 奥谷 弘朗

出雲市 園山 多賀子

水仙の匂いへとけた恨みごと
兵庫県 辻 文平

奈良市 森田 カズエ

今治市 月原 宵明

折鶴の一羽翺び立つ退院日
鳥取県 石井 雅水

松山市 谷真 風

高木 桃里

地教委の来訪午後は大掃除
和歌山県 浦野 和子

唐津市 山下 勝一

鳥取市 両川 洋々

母徳ぶ帯は七彩つづれ帯
岸和田市 原 さよ子

唐津市 久保 正敏

泣いていた妻あざやかな罨を掛け
唐津市 田口 虹汀

書初めの硯はちゃんとかしこまり
吹田市 西岡 豊

岡山県 池田 半仙

七十になって手相が気にかかり
唐津市 仁部 四郎

中古車が俺だ俺だと客を呼ぶ
枚方市 二宮 山久

岡山県 浜野 奇童

のし袋夫婦の会議包み込み
東大阪市 竹中 綾珠

しまい風呂女の日日を流しきる
米子市 菅井 とも子

米子市 小西 雄々

舞台から見ると見物小さく見え
松原市 佐藤 藤子

追いついて友も遅刻の歩を早め
奈良県 宮川 古都路

和泉市 西岡 洛醉

日本酒とワインの違い持つ夫婦
京都市 都倉 求芽

百八つ一里聞えて二里ひびく
八尾市 山下 みつる

羽咋市 三宅 ろ亭

はこりばかり浮べて年の瀬の水たまり
大阪市 吐田 公一

出て来れば切られる役で顔を売り
高知県 曾我部 つぎお

兵庫県 野々口 ゆう也

ピカソから僕の美感が狂いだし
京都市 松川 杜的

ファインダーぐらいの視野で物を言い
浜田市 中川 幸一

岡山県 松本 元江

金貨の絵の良さ僕には分らない
京都市 林 瑞枝

蓼喰った虫が年年太り出す
岸和田市 福島 せつ子

鳥取市 武田 帆雀

八十七歳の母の傘下で心澄む
大阪市 川口 弘生

半分のビールでおはこの黒田節
旭川市 朝倉 大柏

伊丹市 榎谷 寿馬
一番先は長男だろっ渡り鳥

西宮市 妹尾 春江
脱サラの今は農夫の眼差に

浜田市 佐々木 裕
ひっそりと静まり返る返り花

京都市 山本 規不風
助け合いコインを貯めた小さな手

和泉市 岡井 やすお
十二月休みの教師ジョギング

富田林市 中村 優
山茶花の紅ひとひらに温もりぬ

札幌市 北村 深星
逆風もあるぞ明日の竹トンボ

岡山県 岩道 博友
逆境もそのままでよし停年期

豊中市 満仲 きく子
風化した過去をサカナに温め酒

鳴門市 八木 芳水
先進国季節感まで奪い去り

富山市 舟渡 杏花
よこれ紙幣かぞえ紙幣の行方など

大阪市 江城 修史
山茶花の命の限り冬を咲け

八尾市 松下 蕉露
この傘は死んだ彼奴の忘れもの

青森県 五十嵐 操史
脚線美前と後は大違い

大阪市 欄 蘭
もの言えは一言多い世話女房

貝塚市 行天 千代

信じてた人の心の裏表

島根県 西村 早苗
冬の雨ポストへ罪の音おとす

高槻市 田崎 あき子
ラッシュアワー座席の人は眠ってる

鳥取県 羽津川 公乃
七転び八起きのダルマに足が生え

高知県 松岡 三吉
初対面わたしに名刺などはない

吹田市 西川 景子
にじむ汗ラストダンスは妻と組む

山口県 高崎 喜一
強過ぎる横綱負けて憎まれる

東大阪市 三宅 哲夫
踏みまどう程にジャングル化の人道

東州市 小山 悠泉
初夢に見た初恋のお下げ髪

米子市 雑賀 美世
灯を消してあしたの夢を呼び寄せる

今治市 八塚 三五島
ウーマンパワーめいめい違う薄化粧

大阪市 津山 刀水
下手な字が今も生きてる年賀状

堺市 田辺 哲寿
居酒屋のオヤジ酒飲み嫌になる

大阪市 朝倉 利義
君が代は相撲の歌と子が覚え

大阪市 大野 武太
踏切の途中でエンジンからでない

仙台市 川村 映輝
凶作に休耕田もかり出され

兵庫県 森脇 和子
とっつきが悪く損した初対面

唐津市 浜本 義美
年賀状出さぬ分まで買っておく

西条市 片上 明水
眉を剃る割れたお皿をつぐだらう

今治市 新居田 胡頼子
新米の出荷不満も積んで出る

愛知市 国分 甲子郎
なげやりな妻へ良人の記帳面

唐津市 桑原 掬治
五十年生きていたなの同期会

大阪市 旋 鳳
節くれの指がもらった瑞宝章

★ 豊中市中校塚三丁目13-15
投句先 千560 橘高薫風(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題 「笑へう」 選者 森中恵美子

締切 2月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町6-4 NHK

大阪放送局 老後をたのしく係

発表 2月27日(土) ラジオ第一放送

午前9時15分から

堀江正朗・堀江芳子

句集「二人三脚」

川柳に生き抜いた足跡

尼 緑之助

著者の経歴は「あとがき」で大略わかるが鑑賞上大きなポイントでもある。

戦争で失明の正朗氏、病気を再三経験した芳子さん、こんなハンデを背負った半生、斗い抜いた生活記録、一貫した固い夫婦愛の素晴らしさに感嘆するばかりだ。

倅せは雀より先に妻の声

正朗

逆らってあまえて妻の手の中に

正朗

この夫へ生きねばならぬ注射打つ 芳子
寄り添うて貧しさなどは口にせず

如何に愛情が主軸だと言つても、口だけの喧嘩なら日常茶飯事で、夫婦愛の要素でもある。

女房がこわい日もあり娘にあまえ 正朗

言っただけは言わしてくれと負けぬ妻

正朗

言い負けてよかった夫のいい寝顔 芳子

ほんわかほんわか夫と喜劇の幕があく

正朗

この句に見られる小競り合いは二人の真骨

頂、ユーモラスはほほえましいではないか。

如何なる困難、苦悩に対しても泣き事は口にしない。「私たちは私らの道を行く」という気概が表白されている。その支えになつてゐるのが川柳だ。

川柳がどれだけ生活の意義を持つてゐるか川柳は単に遊びに過ぎないと言ふ人も多からう。だが、この夫婦には川柳こそ生命綱だといふことを証明してくれた。

見えぬ目に道一とすじの光持つ

正朗

眠いのには妻懸命に読んでくれ

正朗

心みなぶつつけるペンよ離すまい

芳子

眠くなるまでの柳誌が眠らせず

正朗

両者とも、天分にも依るうが、川柳に賭けた情熱が二人の川柳に生命を与えた。

平易な語句、平凡とも思われる作品ながら不思議に食いこんで来る。技巧に頼らぬ率直さが溢れている。難しい言葉や、カタカナを使わなくても立派な作品は出来るといふことを証明している。ひたむきな川柳追求が見られる。単に出まかせや思い付きの作品ではない。

この魅力は人間味で「川柳は人なり」の証言でもある。
以下抄出して鑑賞の補足としたい。

子と孫と

気がつけば大人になつた子の話

正朗

男対男で父子の政治論

芳子

めでためでたでひとり娘をもつてかれ

正朗

孫ふたり一本ずつの手で愛す
孫の幸子の幸 水掛け不動さま

正朗
芳子

失明の世界

無い音が聞こえる音聞こえない
口惜しさに見上げる空が僕にない
事あれば五尺五寸の荷物なり

正朗
正朗

こんな句もある

落葉ひらり僕に頼ずりして行つた
寒月へガラス踏むよる靴の音

正朗

人並みに晦日を僕も腕まくり
雪とけて山むっくりと立ち上がり

正朗

バラツルを開けばパツと初夏の彩
風船のどこへ行こうか秋の天

芳子

妻の目が子の目がみんな僕の目だ
苦を抜けて古稀還暦の差し向い

正朗

セツとした髪夫の手で見てもいい
本稿を終わらんとして、賞めすぎたのでは

芳子

ないかと、よきものがある。句集を読み返して見れば見るほど、嘘ではない。それは真実味の迫力だと思ふ。現在の境地は

飛び石のように幸せ置いてある

正朗

人の幸、不幸を計る物差しは何処に置くべきか、見事な二人三脚を見せももらった。

「川柳は宗教だ」と言つた人もある。川柳に依つて救われた夫婦と言えば言葉が過ぎるだらうか。

この上の多幸を祈つてペンを擱く。

正朗

芳子

正朗

芳子

正朗

芳子

正朗

芳子

正朗

句集「二人三脚」の感動

東野 大八

「夫は路郎賞」「妻は川柳塔賞」の見出しが出た本誌55年10月号をみて、私ははじめて堀江正朗・同夫人芳子さんご夫婦の作品を正面切って見直した形であった。

險阻耐える苦痛が洩れぬよう

正朗

妻の目が子の眼がみんな僕の目だ

〃

こんな迫力十分な句は、到底なみの人間では作れるものではない。なるほど正朗さんは盲人だったのだと、うかつながら私ははじめて気付いたのである。

嫁がせて最も長き夜となりぬ

芳子

めでためだてでひとり娘をもつてかれ

〃

この句も娘三人を次々と家から送り出した私達夫婦の肺腑をすばりと適確に表現された出色の作品だった。私も妻もまさにその表現の妙に身につまされて、たがいに黙然と言葉もなかったのである。この掲載された本誌の編集は、わが畏敬する不二田一三夫さんが最

後の編集になるものだった。その病氣と編集退陣の御見舞状の端に、私はその扱ひの卓拔さと堀江さんご夫妻に対し「心からの祝意を表する次第なり」と記したことである。

その堀江正朗・同夫人芳子ご夫妻の句集「二人三脚」が、師走も押し迫った十二月二十二日に届いた。二人三脚、いい表題である。盲人の夫を抱えて敢闘する病身の夫と妻の、健全な生命力ある生活の歌である。その後書によると正朗さんは傷痍軍人であった。あの激烈な戦場として戦争文学に残る「台見荘」(棟田博著)のその戦闘に参加された一兵卒だったのである。おそらくその戦闘は埋没地雷によるものだと私は想定した。戦火で隻手となった私の、野戦病院での戦盲者はすべて地雷によるものであったからの仮想による。それはとにかく隻手の夫をもったばかりに、わが哀妻も、今は身障者の県指定の相談員で馳せ回る破目に立たされているのである。当方としてもその新婚当時から二人三脚、赤貧洗うがごとき夫婦生活を送った組である。まったく他人事ではないのである。正朗さんご夫妻にくらべ、まだ私の場合は眼明きであるだけ倅せかもしれないが——とにかく直ちに全巻をじっくり拝承した。

わが更生の思師晚鳥敏仏師は、敗戦隻手の荒廃した私の魂に「君は隻手だから両手の人間より有るんだ」と教示して頂いた。私にとってまさに改悟の啓示であった。またこのと

き「凡中の凡こそ非凡なり」とも申された。私が戦盲の正朗・芳子ご夫妻に贈りたい言葉はこれである。麻生路郎先生御教示の「生命ある句を創れ」の、それは一面に通ずる。生けるあかし」の生命の句ではあるまいか。玉吟数多の句集「二人三脚」中の私の感銘した句を左へ掲げて、句集刊行の祝意の辞とした。

指で知る知恵はたったのこれっぽち

正朗

戦盲の辛い試練で生き残り

〃

嬉しくて眼鏡が邪魔になる涙

〃

涙出すだけの目玉が眠くなり

〃

見えぬのに春だ春だと血がたぎり

〃

盲人に叩かれる蚊がいておかし

〃

妻は月僕は虫の音楽しまん

〃

妻の手を握り直してやつと耐え

〃

妻病む日むだな手さぐり繰り返す

〃

懐しい声へ両手をうけて待ち

〃

失明の夫へ勝気がふと佗し

芳子

貧しさがなんだと言うてみたものの

〃

光なき夫の風呂に灯をともし

〃

片眼づつ分けあうことができたなら

〃

会いたい日夫の一句を口ずさむ

〃

桐下駄を鳴らしてみたい病みあがり

〃

病めばなお夫婦のぬくみ子のぬくみ

〃

親と子の絆よ耐えるはかなし

〃

寄り添って貧しさなどは口にせず

〃

人生の旅平凡な日を愛す

〃

句集「二人三脚」私見

児島与呂志

「ええ本出来ましたなあ」と電話したら、
「もうみんな薫風先生のお世話で作って戴き
ましてお礼の申上げようありません。うれ
しくてうれしくて」。もう泣いている芳子さん
であった。

薄い緑色の表紙、水色で二人三脚の題字と
堀江正朗・芳子御夫妻の川柳句集が出来た。

序文・川柳塔社主幹 中島生々庵、いつも
川柳会主宰尼緑之助、題簽・川柳塔社副主幹
西尾某、見返・直原玉青、跋文・橘高薫風の
各先生の心のこもった、「二人三脚」に対し
て心のあたまる栄光への心が満ち満ちてい
る。あとがきは堀江芳子さんの感謝に苦勞を
隠した喜びを心から書いておられます。その
文も私の心を打つものでした。

正朗さんは失明傷痍軍人です。意志が強く
なければこの世の中で生きられない。それを
支えた芳子さん、そこに川柳があつた。しか

し芳子さんには心臓の病がある。けれどもそ
の御両親の二人三脚をよく知っている娘さん
と息子さんの三人が居たのである。

昭和四十七年度路郎賞

眼閉す耐える苦痛が洩れぬよう

正朗

昭和四十八年度川柳塔賞

めでためでたてひとり娘をもつてかれ 芳子
賞の知らされた喜びを当時その時の気持ちを
正朗さんは家族で乾杯して歌いましたが、そ
の夜は眠れませんでした。昨年、緑之助先生
からいただいた便りの、「次はあなたの番です
よ」が実現してとても嬉しいです。温かい諸
先生や柳友諸友諸氏に生涯手を引っぱっても
らって歩きます。よろしく。

賞の知らされた喜びを当時その時の気持ちを
芳子さんは新春早々に嫁がせる娘の喜びと忙
しさが交錯して何とも言えない心のままを句
にただけでした。「おめでとつ」を連発す
る正朗に今夜はゆっくり祝杯を重ねてもらい
ましたが、とても嬉しくて涙がこぼれました。
ありがとございました。

御夫婦対照のように仲よく同じ考え方なの
ではないかと思ひ支え合われてるのでしやう。

手を引いてくれる子供の歩の広さ 正朗
よく笑う娘のいない日の長さ 芳子
妻の目が子の目がみんな僕が目だ 正朗
光なき夫の風呂に灯をともし 芳子
口惜しさに見上げる空が僕にない 正朗

愚痴ぼろり拾ってくれる夫がいた 芳子
競争で酒酌ぐ孫に酔わされて 正朗
孫一歳と三歳それぞれ友がいて 芳子
合掌の手と手の中の陽が昇る 正朗
神棚の桃の香いただくことにする 芳子

何よりも「くらしのうた」とした川柳日記
を続けられ、これからも続けて行かれるお二
人には、お子達皆さんの御理解の支えが何よ
りだと思ひます。今後共よろしく批判して上
げて下さい。

苦勞を苦勞とせず川柳に生き甲斐を見つ
けられた「二人三脚」推奨出来る句集を二人で
も皆さんに読んで頂きたいと思ひます。

堀江正朗・芳子句集

「二人三脚」

昭和39年から今日まで、生活即川柳のご
夫婦の句、千九百句を集録。

- 題字 西尾 某
- 序文 中島生々庵・尼 緑之助
- 跋 橘高薫風
- 画 直原玉青画伯
- B6判函入り・三百頁
- 頒価 二千円（送料共）

発行所 川柳塔社

いのち

鈴木村諷子選

ひよいひよと渡るトビ職いのちがけ
一徹のいのちかけたがよく解り
切花の短いいのちいとおしむ
生きているいのち十指に血のたぎる
先頭の妻の軍手もいのち懸け
生甲斐はいのちを賭ける芸を持ち
花のいのち女の若さ果敢なくて
まだ生きて時々機打も打ってます
嬰鏢と生きたしのち尽きるまで
資本家へわたしのちまで売らぬ
千羽鶴きつといのちは甦える
ひとつしかないからいのち大事がり
保育器の小さないのち神のもの
今日もまた生きた証に日記書く
いのちの限り生きよと除夜の鐘が鳴り
生き余すいのちだいに老いの初春
サルビアのいのち秋陽へひとと燃え
なす術もなく臨終の秒を読み
胃カメラにいのちの量を測られる
はかなきは人のいのちよちぎれ雲
命延びおとそ戴く共白髪
筍のいのちは伸びる皮を脱ぎ
花でさえないのちを守るトゲを持ち

保夫 弘朗 綾珠 洛醉 木魚 大柏 千世子 新一郎 晴子 洋々 重人 里風 文平 利義 芳子 どんたく 胡頹子 久仁於 四郎 登美也 峰雪 吟平 本蔭棒

寿命延び一桁若いスーツ着る
戦争で散ったいのちを考える
凡人のいのち義理へは逆らえず
日めくりの一枚ごとに減るいのち
燃えつきていのちきれいな風になる
みどり児のにぎりこぶしに生命みる
我が命刹那刹那に支えられ
いのちある今の内にと遺書を書く
明日のないいのちと悟りあくせくと
雪山へ何故にいのちを捨てに行く
愛すれば愛がいのちを大事にし
埋れ火にいのちあずけて老いの日々
シートベルト締めていのちを意識する
点滴にいのち預けて今日も昏れ
いのちまた消える個室の灯が明い

佳 亡妻のいのちがいま献灯の中を降り
助かった命お守り真つ二つ
陶匠のいのちは炎ゆる登り窯
いのち溢れてうぶ声天をつく
蛙戻る母なる川がいのち呼ぶ

人 腹帯をくすぐるいのちしかと抱く
過去未来いのちのきずなみしめる
地 天 北壁に挑む男の命綱 代仕男
軸 いのち尊し地球の上の粟の粒

優 松太朗 静歩 つぎお はつ絵 倫子 哲夫 富子 多賀子 星斗 与呂志 軒太郎 カズエ 凡太郎 素身郎

無口

藤田頂留子選

無口でも波紋を起す石を持つ
面影がまだ消えないか寡婦無口
嫁がせてすっかり無口になった父
無口でも老いのひと言葉静め
愛一つ秘めて日記の娘の無口
珈琲の香りが無口に間を持たせ
一合で無口の父も手をたたき
座をはずすこと考えている無口
距離おいた妻が無口でせめて来る
損得の絡めば無口が口火きる
真実を父は無口な背で語り
信用は無口で通るお人柄
鉛筆をきれいにといで無口な子
沈黙は金が頼みの人みしり
親と子の対決無口のままで明け
立ち直る男無口と縁を切り
妻無口真相告げた奴が居る
正面は黙っていても喰える席
それから無口になってゆく傷手
宮仕え無口なところが買われてる
無口なる妻 貧乏を覗かせず
寄せ鍋に無口ひとりが鍋の守り
年頃の孫の無口に距離を置く

優 与根一 女 甲子郎 喜醉 テル 重人 ひで 軒太楼 芳枝 旋風 四郎 四郎 裕 日枝子 正敏 久仁於 きく子 みつる 早苗 富子 多賀子

美味いともまずいとも言わず精がない
聞き流す無口の男にある自信
本棚を愛し続けて父無口
多賀子
明水
はじめ
三吉
別人のように無口の筆が冴え
不機嫌の無口と知らず話しかけ
新嫁の立場で無口になっている
言いつ分の一つを無口持っている
梯子酒無口な男の法螺をきく
美穂
一路
里風
冬山へ無口になった父の悔
可住
規不風
結婚をしたら無口な人でした
揺さぶられやうと無口が厭という
幸一
幸一
大惨事怒りは衆を無口にし
素身郎
素身郎
辞表懐にしてから無口喋りだす
六龍子
夫無口 火をつけようか宥そうか
住
裏切りにあうと無口に輪がかかり
洋々
雲行きの下で爆弾抱く無口
はつ絵
啞でない程度の聲がよく稼ぎ
幸一
座つてただで納まる父の席
寿美
言わぬ子が名文にした胸の内
あき子
人
心売った日から人形語らない
大柏
地
児の事になると石女口を閉じ
虹汀
天
真白い画布へ構図を練る無口
悠泉
軸

赤

杉浦 婦美子 選

機密もれまんまと無口にしてやられ
横浜の波止場に消えた赤い靴
どう見ても赤着の方が男らしい
赤電話待ってる人の咳払い
赤添えて白もめでたい色になり
赤と黒スタンダールに魅せられる
爪赤い女に指切りしてしまふ
南国の微笑に似合う赤い花
白哲のかつては赤と言ひし人
花束の赤いリボンにある温み
赤字線値上げするからなお赤字
赤い羽根つけぬとひけ目感じる日
冬ばらの赤が老残叱咤する
やっかいな人と出会った赤信号
秋告げて何処へ行つたか赤とんぼ
赤い灯に心が揺れてまた老いず
ピエロふと鼻の赤さに涙する
赤紙の赤子は老いてまだ死なず
木枯しへ真つ赤な柿が一つ揺れ
政治にも赤外線を当てて欲し
国鉄の赤字ローカル線間引く
赤がよく似合つて年齢不詳です
画布さげて気ままな旅の赤字線
カズエ
弘朗
博友
佳雲
哲寿
規不風
代仕男
一止
悠泉
義美
綾珠
多賀子
はじめ
和子
利義
胡頼子
新一郎
一路
素石
正敏
美穂
明水

野地蔵に誰が着せたか赤頭巾
年末へ切符が売れる赤字線
家計簿の赤字子等には見せまいぞ
自画像にちよつぱり赤も混ぜて塗り
耳たぶをまっかに染めるいい電話
赤い羽根買つても福祉は期待せず
赤い紐夫婦の民話聞いていた
棒グラフの赤にセールの背をおされ
赤い赤い虹が追うてくる出逢い
ストープは真つ赤童話の雪が降る
赤い服着て大屋政子は健在で
恋の余韻真つ赤なバラが届けられ
赤電話社会の縮図知っている
愚痴を聞くことに馴れてる赤提灯
赤旗に疲れが見える長期スト
佳
裏街の汚れに負けぬ赤い靴
赤字だと言いつつ店舗建て変える
赤電話きいてはならぬ事も聞く
野良終えた顔へ夕陽の赤が染み
値上りの赤字へ母が運ぶ針
人
赤鉢巻気迫に一つ買わされる
道子
地
赤信号ひと息入れる車椅子
素身郎
天
夕やけの真つ赤な向う太郎住む
はつ絵
軸
カーネーション赤は倅せなど教え

初歩教室

題 — 真心 —

本田恵二郎

年齢も性別も職業も超越した良き仲間 —

上座も下座もない円い車座の顔顔顔 —

作句することに生甲斐を感じ、その倅せを

分ち合う友を持つことを誇りとする男と女た

ちの群像 — その名は柳友と言う。

その柳友たちは常に若々しい。なぜだろう

か。それは常に時代と共に歩き続けるからで

ある。そして、それぞれが住む地域社会の和

と文化向上に寄与し続ける純良な住民でもあ

る。さあ今年も手を継ぎ合って、楽しく前進

しようではないか。

財は無し真心だけをゆずります

美津子

(ふところは空っぽ 真心なら上げる)

綿入れに母の真心あたたかい

ふみ

(綿入れのような真心母心)

真心をこめた手作りお歳暮

やすお

(手作りの歳暮に真心しみている)

真心がきつと通じる日を信じ

と心底で知る真心に手を合わせ

(と心底で拾った真心抱きしめる)

真心が冷い風をそつと変え

真心の微笑みマリアからもらい

真心のこもる手紙を読み返し

(真心の文読み返し読み返し)

立志伝真心のほかなにもない

錢けに説く真心に目が光る

(錢けに説く真心の目がぬくい)

守銭奴は真心よりも金に生き

(真心のかけらも持たぬ守銭奴で)

真心を売り物にする企業ふえ

(真心を売物にしてよく儲け)

真心を伝える言葉が出てこない

(真心を伝える言葉探さねば)

真心が伝わるころよい涙

(ころよく涙腺つつく真心よ)

病む友へ祈る思いで鶴を折る

(病む友へ祈りを込めて鶴を折る)

真心のこもった手料理母の味

(手料理の味 母の真心の味)

真心が遺品となった千人針

死刑囚壁に真心書き残す

(死刑囚の真心壁に書き残し)

幸子

同

同

美智子

同

同

風童

同

同

みつる

同

同

元江

同

同

貞子

同

同

武太

同

同

同

同

同

同

堀江正朗・芳子氏より句集「二人
三脚」出版記念として

金一封

ご寄附いただきました。

川柳塔社

手作りの品で真心届けられ

(手作りのぬくい真心届けられ)

汚職して善意の真心踏みにじる

(真心を汚職汚職が踏みにじり)

真心が通じ奇跡のカムバック

開封をすれば真心こぼれ落ち

(封切れば真心にっこり笑みかける)

真心に打たれ本音が涙ぐみ

真心で霜柱踏む百度石

(霜柱踏む真心の百度石)

足止めて真心入れる社会鍋

真心と判る涙を見る刑事

(真心の涙と刑事見抜いてる)

真心の諫めの言葉骨がある

(真心の諫言骨があり肉もある)

真心が結ぶ二人の楽し手話

(真心が通い合ってる手話楽し)

公乃

同

同

利美

同

同

古都路

同

同

兼治郎

同

同

千子

同

同

同

同

胸裂いて見せたい紅くもえる血を
わが心神様だけが御存知よ

昭治
同

(真心は神さまだけがご存知よ)

真心で詫びられ母の城くずれ

真心に闘病生さる泉湧く

芳枝
同

(真心が闘病心をゆり起こし)

どなられた師の真心がいま解り

どたん場で悪友真心出してくる

三千代
同

(どたん場で悪友真心見せてくれ)

真心が通じぬこともある浮世

昭代
同

言葉などいらぬ握手のあたたかみ

(言葉などいらぬ握手にこもるもの)

房子

真心が顔の赤さにカバーされ

同

(真心の顔紅らめて紅らめて)

真心が通じ全快神の慈悲

同

(真心が神に通じて癒え近し)

真心を『助け合い』まで運ぶ幸

芳水
同

真心で鉄拳飛ばし涙のむ

同

(真心の鉄拳涙ぐんでいる)

瓢太

真心が遂にハートを射止めたり

同

(真心の矢羽にハート射抜かれる)

同

真心に勝る手段はない処世

同

(処世術の第一歩は真心だよ)

同

真心を売物にしてよくはやり

同

(千客万来真心上手に売っている)

紀久子

(真心にそつと撫でられ立直り)

(真心が真心誘うボランテア)

真心で尽くそうきれいな夕焼けだ

(真心で尽くせ尽くそう西空)

同

お百度の跳に真心こめている

忠広

(お百度の跳にこもる真心よ)

同

真心がこもった故郷の梗餅

同

(梗餅里の真心抱いて来る)

深星

帯とかぬ看護へ姑の誤解とけ

同

無口さの誠意社長の目にとまり

同

(口下手の真心社長の目にとまり)

胡顔子

忠言にこもる真心抱いて泣き

同

真心に触れてはぐれたわだかまり

勝美

真心を千手観音うけとめる

同

真心が見つけた満天母の星

同

ごますりでない真心をしめすとき

保夫

真心が今くつとくるタイミンク

同

奉仕団真心だけを置いて行き

三五島

真心が非行の道から這い出させ

同

真心へ権謀術策の旗隠せる

武水

真心に磨りへらされた百度石

同

真心を知った朝から嘘つけぬ

同

ひと目ひと目真心を編む腕の冴え

寿子

(真心の編棒肩巾胸の中)

同

真心をひと目ひと目に込める幸)

同

真心が涙の毯へ透き通り

同

美辞麗句真心どっかに置き忘れ

柳五郎

腹藏なく言う真心をけむたがり

同

金額の多寡で真心まで計り

同

真心があれば必ず通じ合う

義美

真心で勤め余生が報われる

同

真心で売ればお客がついてくる

同

真心を打算とみられたこともあり

凡太郎

真心に囲まれ宿痾癒えそめる

同

真心に触れて心の角がとれ

同

真心がやっと通じた十二月

山久

真心へ足踏みしたい時もある

同

信じてた真心だけはくずれない

同

題―善意―2月20日締切(4月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四

⑦七一

本田恵二朗

柳界展覧

(原稿締切毎月末)

集録・香川醉々

発行・風景社・〒390松本市
大手3-5-13しなの川柳
社へ申し込めだ可。

■川柳句集「まつうら」第
4号が発行された。発行者
新岡回天子・発行所・虹川
柳俱樂部・判型B6・156ペ
ージ。

■堀江正朗・芳子句集「二
人三脚」発刊された。
B6・304ページ・布製表紙
箱入・二千円・発行所・川
柳塔社・序／中島生々庵・
尼緑之助・題字／西尾葉・
跋／橘高薫風・写真／板尾
岳人。なお出版祝賀川柳大
会が、1月24日出雲市民会
館において、地元柳人をも
とより、本社からも多数の
柳友が出席、盛大に行われ
た。

■石曾根民郎著「まつもと
歳時記・住めばわが町」が
発行。川柳こばなしを織り
込みながら、軽妙な筆致で
つづる松本風物詩である。
筆者は「川柳しなの」の主
宰者である。A5変型・224
ページ・定価一三〇〇円・

円。

■たいまつ社発行山村祐・
坂本幸四郎共著「現代川柳
の鑑賞」四六判・定価千七
百円。

■番傘折鶴川柳会30周年・
深江勝人句集「いなすま」
発行記念川柳大会が次の要
領で開催される。

とき・57年4月18日(日)
正午開会。
場所・大阪府中小企業文化
会館2F(大阪市天王寺区
上汐4丁目4-25)

祝辞・岸本吟一氏、お話・
森繁苑莊氏、句集鑑賞・田
中南都氏。

宿題Ⅱ2句・締切13時30分
・欠席投句辞・席題なし
・伸びる
歌藤 一麦選

「腕」 歌藤 一麦選
「姿」 酒井 路也選
「活発」 藪内千代子選
「パスポート」 梶川雄次郎選
「ペン」 田中桂太楼選
「新鮮」 南出 陽一選
「丸顔」 奥田 白虎選
「今」 曾根 幸広選
「原稿」 山崎 文義選
磯野いさむ選

特別課題Ⅱ「いなすま」

深江勝人選(2句3月末ま
でにハガキ)会費三千円・
懇親宴三千五百円。
(特別課題)投句先、懇親
宴お申込み先)

〒537大阪市東成区深江南2
-14-23
深江勝人 TEL06-
976-0377

主催・番傘折鶴川柳会
後援・番傘川柳本社
■大東市民川柳三周年記念
大会が次のとおり開催され
る。

日時・57年5月23日(日)
正午開場
場所・大東市立市民会館
祝辞・岸本吟一氏他。柳話
・古下俊作氏。

宿題(1句・出句切13時)
朝(事前投句) 山本 翠公選
口笛 平田みのる選
おでん 伊藤千代磨選
漬物 久保田以兆選
道連れ 歌藤 一麦選
仲居 尾谷 清風選
霧囲気 中尾 藻介選
前進 安井 久子選

個性

ことは 奥田 白虎選
宝石 小松原爽介選
百度石 藪内千代子選
西村 芳川選
法律 永田 帆船選
接待 中田たつお選
金魚 岩井 三窓選
挨拶 増井不二也選
明日 金泉 萬葉選
仲人 西尾 栗選
残念 龜山 恭太選
時間 磯野いさむ選

事前投句は4月30日切。
〒574大東市御供田2-21-
16 山本翠公宛 TEL
(0720)71-2800
会費・一千円、懇親宴・四
千円。

主催・大東市民川柳会
後援・大東市教育委員会・
日本川柳協会

■昭和57年6月6日(日)
津山市芸術祭第4回川柳大
会が開催される。題「たた
かい(青山選)カード(明
選)遊ぶ(愛郷選)彩(由
紀子選)道(一吹選)紙(醉
々選)洗う(寛哉選)人生
(三窓選)珈琲(作)郎選)

新 同 人 紹 介

桑 原 掬 水

浜 本 久 仁 於

久 保 正 敏

仁 部 四 郎

田 口 虹 汀

木 塚 素 石

浜 本 義 美

以上一回天子・形水・梨推薦

父(冬二選)

▽同人・柳友消息△

▼柿沼考人氏(川柳苗木の会主宰)より御懇篤な書信拝受。

▼福田丁路氏(高槻市)目下自宅療養中の由。お大切に。

▼堀江正朗・芳子さん(鳥根県)より句集発刊に關しての礼状拝受。おめでとようございました。

▼西村早苗氏(鳥根県)近況の模様拝受。

▼故八木摩太郎氏夫人得子様逝去。12月19日自宅で告別式。栗、維久子、千万子、ひろ子、天笑、二三、月子各氏がお見送りに参列。

▼宮西弥生さん御尊父長逝享年78歳。12月24日告別式が行われた。謹悼。

▼塩満敏句集「夫婦酒」は生々庵主幹の序文をいただし陽春発行を目指して鋭意編集。編集担当は、酔上梓の節は何卒宜しくご配慮のほどを。

▽句会案内△

■菜の花句会

時・2月10日(水)夕6時
場所・西郷会館(八尾神社境内)近鉄線八尾駅下車

兼題Ⅱ節分(西尾菜)階段(高杉鬼遊)車・大阪風景

・語る
■南海川柳部

時・2月18日(木)夕6時
場所・南海会館ビル本社地下食堂

兼題Ⅱクラクション・コンバクト・リズム
■南大阪川柳会

時・2月19日(金)夕6時
場所・寺田町高松会館
兼題Ⅱ頑固・ギョウザ・ぐず・現役

■駒つなぎ川柳会

時・2月22日(月)夕6時
場所・寺田町高松会館
兼題Ⅱ展開・会合・腕・寒い。

■東大阪川柳同好会

時・2月27日(土)夕6時
場所・東大阪中央公民館2F(近鉄永和駅下車)

兼題Ⅱ色・蓋・順・王様
■堺川柳会

時・2月16日(火)夕6時
場所・堺青少年センター3階(阪堺線綾の町下車西北百米)

兼題Ⅱ袋・鬼・豆・火

川柳塔改題200号記念川柳大会

日 時 昭和57年 4 月 4 日(日) 午前10時30分開場・12時開会
 会 場 阪急グランドビル26F 会議室
 大阪市北区角田町 8-47 TEL(06)315-8368
 (国鉄大阪駅、阪急梅田駅より歩2分。阪急百貨店東
 入口前)

挨 拶	中 島 生 々 庵
講 演	伊 丹 三 樹 彦 氏
兼 題	山 内 静 水 選
	濱 野 奇 童 選
	河 村 日 満 選
	長 野 文 庫 選
	尼 緑 之 助 選
	小松原 爽 介 選
	去来川 巨 城 選
	岸 本 吟 一 選
	西 尾 栞 選
席 題	橘 高 薫 風 選

各題2句・締切12時(欠席投句拝辞)

会 費 2,000円(記念品呈)

★昼食は用意致しませんので各自おすませ下さい。

- ☐ 開会の辞・菊田いさむ
- ☐ 閉会の辞・黒川 紫香
- ☐ 司会・西田柳宏子

200号記念誌上旬集 作品募集

川柳塔5月号に掲載。1人10句
 出句料 2,000円。同人、誌友を
 問わず、ふるってご参加を。

締切・3月20日厳守

所定の応募用紙を使用のこと。



本社 新春句会

会場 金属会館

七日 午後六時

おだやかに明けた昭和五十七年。「おめでと」の挨拶も初春らしく、一杯機嫌の顔もチラホラ。花やかなこの席に生々庵主幹、好郎、小松園両副理事長の姿が見えぬのは、やはり淋しい。

恒例の短冊交換は長年お世話頂いた瓢太氏に代り今年から重人氏が担当されることになった。苦勞さまでした。56年度月間賞永久保持の憲祐氏、同本社句会全出席者三十一名に栗主幹代行から表彰があり、本年度柳話のトップバッターは若本多久志氏。

昨年10月号の本誌に「すばらしき哉人生の秋」と題するエッセイの中で「貝原益軒訓を守って八十何歳まで生きてこれた」と書いておられるが、今日のおはなしは、その貝原益軒の養生訓。欲を去り忍の一字を守る。養生の他に長寿の薬はないことは分かっていても、これを実行するにはよほど強固な意志がなく

ではかなうまい。

初出席は片岡筍氏（大阪市）と長谷川春蘭氏（大阪市）。本年初の月間賞は高杉鬼遊氏が獲得。（史好）

（受付）与呂志・重人
（進行）柳宏子、記録・鎮彦・射月芳

出席 与呂志・萬的・喜一郎・水客・富子
美智子・小路・千万子・眉水・好子・雅風・射月芳・太茂津・幸・川狂子・星斗・史好・勝晴・楓楽・山久・文秋・花村・あいき・智子・柳宏子・白水・潮花・蘭・紫香・右近・英子・瓢太・滋雀・千代三・筍・寿美子・綾珠・勝美・憲祐・好一・洋敏・喜風・涼一・吸江・英千子・度・唐佑・三十四・岳人・白兔・規不風・桐下・柳伸・春蘭・幸太郎・多久志・薰風・凡九郎・敏・酔々・たつお・栗弘・頂留子・恒明・雀踊子・メ女・鎮彦・一二三・健司・寿子・小雅子・元紀・翠光・鬼遊。

席題「流れる」 梅原憲祐選

加茂の水いろの流れの京友禅 幸太郎
去年今つなぎ流れる除夜の鐘 右近
川上へ向つて流れる雲の影 花村
星一へ流れていとしいひとと思う メ女
激流へ竿一本の長い旅 たつお
満ち潮に乗って流れる桜貝 規不風
流されたところで小さな花をつけ 智子

七草が過ぎると時が流れ出す
流れも来るてはならない長寿村
したたかな女流れを越えて行く
せせらぎの流れを渡る石一つ
逆らえぬ流れに生きた母のせな
流しても消せない傷が一つある
商魂は時の流れに棹をさす
幾度か歴史見てきた流れ川
生きさまをあらわに枯葉流れゆく
首塚へ流れる雲よ何語る
流れには乗れない釘は沈むだけ
ふるさとの流れを鮭は忘れない
さい果てへ流れ流れて荒れた肌
西成へ流れて朝のとんど焚く
貼り紙の墨流れてる店じまい
根なし草時の流れにさからわぬ
ちぎれ雲流されまいと老る私
人の世の流れに添って老い生き
大阪の夢が流れる御堂筋
住吉さん流れを止める太鼓橋
二次会には流れにまかす酒の酔い
ふるさとへやっばり流れた母子星
星流れ悔恨多い過去に残る
流されぬ言葉一つが胸に住む
流れにも乗れず寒空地下に寝る
流されて流れて風は考える
瞿沢に水が流れる母の故里
風化した歴史の流れに教えられ
少年の夢に輪をかく流れ星

史好 眉水 寿美子 勝美 柳伸 鬼遊 文秋 眉水 吸江 萬的 健司 鬼遊 千代三 千代三 小路 重人 好子 多久志 潮花 勝美 山久 桐下 射月芳 英子 白水 桐下 岳人 洋敏 頂留子

流れ雲お前は誰に逢いにゆく
流灯の一つへわびる罪をもち
流し雛やさしい鬼がきつと待つ
流れ星女の無理をきいている

席題「隠し芸」

藤村 女選

隠し芸わたしあんなに惚れました
一つしかない隠し芸を強いられる
いつどこで覚えてきたかかくし芸
隠し芸の木遣りへどつと片想い
出雲の国のこの人にして安米節
隠し芸じきに裸になりたがり
隠し芸三味線弾いて小唄出る
隠し芸順がまわって席外す
駄馬になる父が持ってた隠し芸
酒の威を借りて男がストリップ
彼女だけが聞いてくれている隠し芸
下手くそが一番もてた隠し芸
営業マンにまわされた隠し芸
先生も酔えば裸で踊る芸
隠し芸親を泣かしたとは言わぬ
新入社顔を売るのも隠し芸
隠し芸まっ先に出る黒田節
一つだけのかくし芸だ座を湧かせ
隠し芸司会は軽く歌を出し
峰歩くだけが男の隠し芸
隠し芸なるほど婚家をしくじりぬ
かくし芸に手品が出来て困らない
かくし芸無いので犬の声で鳴く

あいき たつお 涼一 憲祐
酔々 射月芳 英王子 智子 栗 星斗 美智子 勝晴 鎮彦 美智子 度 蘭 勝美 吸江 綾珠 星斗 岳人 三十四 綾珠 幸

腰を振るグアム仕入れの隠し芸
隠し芸鳩ポッポとは恐れ入り
一つ覚えの芸だがいつもうけている
隠し芸苦手で社長酌きまわり
金かけているとわかったかくし芸
生真面目な男くだけた隠し芸
川柳と奇術瓢太の隠し芸
神妙に素直に社長の詩吟聞く
母親を泣かせた父の隠し芸
箸おいて社長の小唄にかしこまる
膳見せるたった一つの隠し芸
かくし芸本番前で人がやり
おてもやんしとやか秘書の隠し芸
隠し芸年季のいった淡いのと
隠し芸見てから親近感が湧き
たばる坂出して社長は座をはずし
隠し芸手順が狂っていた奇術
下座から無口飛び出た隠し芸

兼題「儲ける」

板尾 岳人選

死角から儲ける道が見えてくる
酔えば又昔儲けたことに触れ
儲けてるそうなる人相まで変り
儲けても儲けても振る妻の旗
税務署がいやになる程儲けたし
儲ける話を知っている無職
耳よりな儲け話にや金がいり
儲けさす神様だから儲けてる
儲かったら買ったがなという手形

憲祐 吸江 文秋 洋敏 山久 柳宏子 喜風 幸 筍 寿美子 太茂津 喜一郎 あいき 柳宏子 右近 小路 眉水 女 健司 柳宏子 吸江 楓楽 小路 雀踊子 軒太楼 幸太郎 好一

儲けてる男の声がいやらしい
年金で庶民長生きして儲け
一人だけ儲けて九人損をする
儲かったあとは勲章欲しくなる
儲けてる男の歩巾が広くなる
正直に儲けて母を裏切れぬ
儲けにもならん電話に湯冷めする
追徴金儲けはたいてなお足らず
風小僧に儲け話をさらわれる
エンピツが折れて儲けを口にせず
戒名をつくっただけで丸儲け
一儲け企む男の咽喉仏
儲からぬ漫画を書いて病んでいる
確実に女は利子を増やすだけ
持って死ぬ気であるらしい儲けよう
儲けてるらしい小唄を習いだし

射月芳 与呂志 紫香 元紀 楓楽 桐下 小路 静馬 寿子 水客 眉水 眉水 幸 規不風 恒明 智子

4Bの芯やわらかく儲けよう

儲けてる男にささる後指

大穴を当てた男がガムを噛む

頭良過ぎておつちよこちよいに儲けられ

寒風へ儲けそこねた紙吹雪

儲かった神はめし屋でめしを食う

鳩死んで手品師儲けの酒を断つ

直立不動で儲けてることは気付かせず

処刑する前に儲ける話あり

兼題「雑煮」

村田 瓢太選

目出度さは雑煮の膳がひとつ増え

今年又雑煮の餅の数が減り

雑煮にも若い世代の餅離れ

酔々

雀踊子

英子

太茂津

どんたく

酔々

桐下

水客

岳人

美乙女

どんたく

文秋

雑煮にも明治生れがいて頑固

雑煮より気になつてゐる御年玉

雑煮餅今年の運をのみしめる

雑煮餅刑の重さのみしめる

女子寮で帰郷せぬ娘が炊く雑煮

お雑煮の湯気の向うに母がいる

お雑煮のおかわりをいかにきり箸

初旅の行く先き先きにまつ雑煮

雑煮まで老いて従う嫁の味

お雑煮が好きで達者な祖母が居る

家族揃い雑煮を祝う平和な日

三代夫婦揃って祝う雑煮箸

山小屋の雑煮で祝う初登頂

餅の数みんなに聞いて炊く雑煮

吸江

鎮彦

滋雀

雀踊子

紫香

寿美子

栗

頂留子

筍

柳宏子

庸佑

幸太郎

たつお

紫香

お雑煮を祝い日本を見直す日

雑煮餅の数聞いている子沢山

雑煮祝う家族に指定席があり

仕来たりの通りの雑煮で恙がなし

雑煮炊く厨へ初春の陽がこぼれ

嫁った娘の名も書いておく雑煮箸

餅の数自慢の若き日の雑煮

転勤へ土地の雑煮がなじまない

それぞれの故郷の雑煮にある歴史

平凡のよさが分つてきた雑煮

出稼きの郷愁一碗の雑煮餅

四思かみしめ雑煮の箸をとる

お雑煮も奇麗に食べて皆達者

みそで良しすまし尚良し雑煮好き

おけら火を京の雑煮は待つてゐる

陰膳の雑煮出稼ぐ父がある

巣立ち皆させた小さな雑煮鍋

雑煮祝う不況耐え抜く氣も新た

兼題「盃」

神谷凡九郎選

記念盃底の寿浮び出る

言いがあつて盃持つてくる

盃伏せてその後の愛をたしかめる

元且は弱虫にはならぬ

元旦の盃太陽は変らな

ケチくさいこと忘れようオイ盃だ

盃洗ですさいと女酔うていず

盃手に本当の自由考える

さめてゆく盃に棲む紅の彩

文秋

蘭

千万子

白水

美智子

涼一

幸太郎

庸佑

筍

智子

眉水

吸江

花村

白水

涼一

滋雀

雀踊子

瓢太

喜一郎

文秋

美智子

鎮彦

吸江

眉水

静馬

萬的

寿子

忘却へ水サカズキもせずいへき
 盃を乾しても嘆も悔いがある
 盃が知るこの人の酔かげん
 盃の絵柄に下戸も口をつけ
 盃の底から紫が押よせる
 盃のなかで男が小賢しい
 ライバーの祝盃だから高くさす
 父と子へ盃後継ぎには触れぬ
 盃の地酒の味もひとり旅
 決闘がつくまで盃は伏せておく
 列島を盃にして獺をのみ
 八分目の盃とろりを知らず乾し
 盃を伏せた男の本気
 盃と一升壺で男達
 盃を返してコップ酒がよい
 むかし話の好きな女と盃交わす
 盃に幾度び憂さを注いだろう
 盃へ口惜し涙は落とさぬぞ
 ちよびつとてよい盃も新春の妻
 妥協するための盃なぞ持たぬ
 贅沢な盃だから酔うてみる
 変身をする盃のひとりごと
 盃に己れの影をのんでいる
 泣き笑い盃事のあるかぎり
 くい呑みの厚味を愛す口あたり
 盃の野心呑み給えあけ給え
 ええかげんな神様もいる三三九度
 盃洗の水にしずめる私語がある
 盃を溢れた夢はもう追わぬ

柳 史 千 勝 寿 水 憲 桐 涼 美 小 雅 射 射 雅 千 醉 楓 涼 小 潮 岳 柳 小 太 重 寿 白
 兎 好 万 美 子 客 祐 下 一 智 雅 月 月 風 代 々 一 路 雅 花 人 雅 茂 美 美 兎

兼題「犬」

黒川 紫香選

今日に乾盃これから生きて行く
 人間は素直でない犬が言い
 押売りへ隣の犬が吠えてくれ
 野良犬の自由うらやむベット犬
 秋田犬と毎朝出会うマルチーズ
 元日の朝を小犬と走り出す
 負け犬で手の鳴る方へすぐに向く
 仔犬がついて来て見つかったカクレンボ
 大小屋にひとまず逃げて身構える
 血統書にせ物だとは大知らず
 飼い主の癖を見抜いたブルドック
 外された鎖にじやれるうちの犬
 血統書ないから野犬のボスでいる
 もらい子をしてから犬が邪魔になり
 捨てられた犬へ夕陽が落ちかかる
 負け犬と承知の妻がみがく靴
 足音を知ってる犬にあるみやげ
 尾を振って叩かれてくるどじなポチ
 犬にまで血統書という七光り
 大小屋を直してやった戌の年
 野良犬に縄張りがあり匂い嗅ぐ
 保健所の車を犬は知っている
 三ヶ日おもちゃの犬が呼吸する
 美しい犬だと犬もふり返り
 外車乗る犬は毛並も違う色
 大だけが私のおとからついて来る
 幸せな犬でのんびりあくびする

凡 九 哲 静 美 智 眉 憲 萬 花 多 重 富 小 洋 一 憲 智 英 一 二 星 射 涼 寿 千 雅 美
 九 郎 夫 馬 乙 子 水 祐 的 村 久 人 子 雅 敏 三 祐 子 子 三 斗 月 一 子 代 風 美 子

犬死んでそれから犬をよう飼わず
 少し甘えた野良犬の尾が太い
 老夫と私今年も寝正月
 逃げだした犬は追わないことにする
 ならされた犬で真っ直ぐマイホーム
 大年の犬オアゲーの服を着る
 寒い夜の犬がなかなか鳴きやまぬ
 狆抱いてちやらちやら可愛くない女
 野良犬に石を投げてでも当たらない
 訴える瞳で野良犬ついてくる
 落ちた金犬がじつと見つめてる
 うちのボチニ掘れワンワンとは吠えず
 野良犬のとても寂しい目と出会う
 成年の犬で春から胃をこわし
 捨てに来た犬が尻尾をふっている

花 白 健 勝 柳 水 射 健 眉 元 美 鬼 紫
 村 兎 司 美 伸 客 月 司 度 紀 智 遊 香



PLUS

高級洋菓子・レストラン

堺 市 役 所 前

TEL (21) 2 3 3 4

老地神壇

■原稿用紙を使用。締切毎月末着便まで。
十七字以内の句に、下三マスに雅号。

(整理・香川酔々)

尼崎いくしま川柳会 黒川 紫香報

坂道があつて思い出多くなる
坂あつて登れば空に白い雲
坂道に店の重なる五条坂
山坂を越えてあなたにありがとう
おとなしくなつた男の下り坂
さよならになりそな予感で逢いにゆく
びつたりな妻の予感ほ口にせず
いい予感話せる人から電話くる
宝くじ買ひに行く日の良い予感
背信の予感へ枕裏返す
近い人一番おそく出席し
セツとして法事や行事よく続き
すばらしい蘇鉄の並木街 堺
小猫にも鈴と一緒に迷子札
まだ拗ねている子の箸を割つてやる
飲み捨ての缶に白さが溜る霜
ポーナスを先に知つて吸取紙
耳鳴りが齢だ齢だと嘯いて

幸子 唯夫 湖澄 千子 かすみ 晴子 美智子 浩 和子 弥生 貞子 まさ すす 郁栄 紫香 保蔵 ハツエ

お人好し風邪がはやれば風邪をひき
京都塔の会 松川 杜的報 牧郎

宿の下駄同じゆるさが揃わない
岩海苔の能登に働く亡母を見た
舞妓三人三つの顔を持つ
丁度いい距離で誰かが鐘をつき
栗御飯炊いて松茸遠慮する
一合の酒に酔える日酔えない日
落日の赫わたしの妬心あざ笑う
老いてゆく寂しさ虹を追いかける
さくら一枝白拍子の声すき通る
手洗鉢秋の彩した枯葉浮く
石ひとつにも位置あり画僧の作る庭
毎日をむさばるよに母の独楽
求人欄むさばり老眼諦めず
野良犬のむさばり悲し明日がない
連絡船着いて離島は活気づき
付箋三枚つけて新居へ着く手紙
着払い息子の匂いする洗濯物
ふるさとに着いて肩巾広くなる
乗換えてまた乗換えてくにに着き

紫香 和友 杜的 求芽 花代子 芳子 美穂 美智子 水客 潮花 萬的 明代 白溪子 三求 いさむ 誠史 俊三 白李 飛鳥 孝華 登美也 みろの きみえ 独仙 亀甲 多賀子

にた川柳会 西村 早苗報

一言の返事がほしい曲り角
目標がはるか彼方にはけて見え
雨雲の下で思案の阿呆鳥
この雨が雪に変わるか底冷える
酔えば又からかむのが居て忘年会
側からは幸福に見るタイヤ婚
風紋は哀しい風の衣すれか

早苗報

孝華 登美也 みろの きみえ 独仙 亀甲 多賀子

向きのない足を誘った千鳥足

あれこれと思ひ日がたつ不精者
甘え泣きして母の気を引く知恵もよし
シングルが流れて街が動き出し
いい年を迎えるための忙しう
各んばが理屈をつけて植木買う
どこ迄も落ち込む杭の音を聞く
ロボット時代へ不安な労働者
北窓に木枯し冬の笛を吹く
行きすりに声掛け合うも遍路路
無駄のない男はひとりて飲みたがる
目の位置をはずし口から洩れる愛

栄 九三 花子 裕 夢醉 幸一 寿美子 鶴丸 与根一 孤呂二 早苗 武助報

岸和田川柳会 植山 武助報

半分に分けたつもりへまだもめる
半分は女性ですよと居直られ
その愚痴を半分にして帰すなり
半分は母の手を借るお裁縫
半分は見栄もまじった帰朝談
半分に分けるケーキを子が見つめ
逆転にあとの半分賭けてみる
責任をとると男の太い眉
責任をとる日の空は晴れている
責任感じししし迫る子の寝顔
責任はなくなり気儘な畑仕事
責任を忘れた子等で遺産採め
養老院子に責任のない時世
同情はしても責任のない他人
責任をちよつぱり果す慈善鍋
腹ごしらえするとぬむたい一人旅

加代子 希久志 せつ子 ひで 世界人 白光子 射月芳 佳生 幸代 甘平 こう秀 義秀 操子 さよ子 民治郎 武助

母と娘の対話もはずむお年頃
金賞が招待状で来る誘い

川柳しんぐう

川上

浪速子

幽の抜けた顔で善人悪びれず

遠慮なく抜歯も見せて夫婦なり

三歳児真珠の歯並び尚可愛い

美辞麗句金歯ちらちらのぞかせる

大笑したいが歯並び気にかかり

珍客へ幾歳月を飛び越える

珍しいだけで値踏みのかかぬ石

珍客へ中華たのんでいる受話器

珍中の珍と松茸もてている

珍しい海外土産は日本製

勇み足になるまい詰め言葉撰る

愛の鞭過ぎた教師の勇み足

年末の物価へ母の勇み足

まだ若いつもりをプラン笑い出す

あの頃の若さを話す勇み足

景品へ女心がまだ揺れる

客足を読んで景品笑いだす

景品を見てから抽籤引きにゆく

物言わぬ景品財布のひもゆるめ

景品につられて女買ひあさり

川柳大阪

西岡

洛辭報

無為の日もパンにバターが溶けてゆく

つくろって女は愛の糸つなぐ

嬉しい日悲しい日にも花は売れ

地下鉄を出て方角にうろたえる

地下鉄へ寒波が背中押して来る

富志子

浪速子

十郎

まさ子

八千代

大輪

富子

千寿子

弘生

里美

朝夢

公治

溪水

白溪子

道子

幸

武太

とよ子

武雄

英子

明男

与呂志

覇詩芽

六龍子

希久志

善紫

みつる

自己主張心の中が透き通り
學歷がいつか疎遠にしてしま

誤解したままで珈琲冷えて来る

歩道橋見事な月へ足を止め

武器よりも強い平和のこぶし上げ

久々の出逢い過去には触れぬまま

おしゃべりが続いて団地昼平和

地球には核はいらないデモ続く

人間の弱さ麻薬に取りつかれ

億という金で麻薬が闇に消え

太陽も月も逆さにする麻薬

老眼にボルノ映画の度があわず

苦勞して育てるだけで良しとする

惚れ抜いて苦勞覚悟の手鍋下げ

南大阪川柳会

中川

乱氣流にのって重点みうしない

会議踊って重点がそれている

重点をどこにおくかでまたもめる

おとなしいのも従って行くブラカード

従順な妻にも母の芯があり

関白宣言する必要もない夫婦

帯に短かし襷に長い家さがし

住宅プランそれから爪に火を灯す

マンションに囲まれ四季の音がな

充分でなかった釘が錆びている

充分と思わぬ妥協点がある

たまるほど充分言ってくれぬ金

充分といえぬが今日を精一杯

渋滞の経験がないかたつむり

喜醉

本蔭椿

与呂志

ひろ子

比呂志

君枝

洛醉

敏

道子

天平

笑風

鉄心

醉花

秀峰

千梢

千代三

凡九郎

文秋

公一

智子

瓢太

恒明

君司

健司

雀踊子

楓楽

頂留子

信治

渋滞へ男鼻毛を抜いている
はかどらぬ仕事へ効いた鼻薬

十若く見えるとクリム買わされる

十円の電話に愛を握られる

十代の娘が抱いている花言葉

母となる十月の鼓動が満ちてくる

勝山双葉川柳会

河野

君子報

表札はローンの重さ知らぬ氣に

新築の門に表札いばつてる

さようならささいな嘘で終った日

あるときの夫の嘘を聞き流し

嘘つけぬ氣性が重荷になることも

言い訳の今夜も嘘の匂いする

鎮彦

久子

度

柳伸

悦郎

滋雀

楓楽

好子

千子

節子

秋子

久子

佳句地10選 (前月号から)

里小路選

酒の量敵は確かに読んでいる

喪の明けた女の肌にあるほてり

全集の背中奇麗なまま並べ

忘れたい忘れたくない掌を合

万燈の中の一つに母がいる

もうそこが峠と妻があとを押す

当番をすると電話がよくかかる

枯れ切れぬ女がさがす道しるべ

小さくなった父の飯眼を起すまい

秋晴れへ長寿の人のいい欠伸

水客

一べんも嘘はつかぬと大真面目
 みかん一つしっかり抱いて乳母車
 子をだしに楽しんでいるみかん狩り
 お歳暮の品が決まらぬエレベーター
 エレベーター視界が見えてすくむ足
 エレベーター迷う心へ妥協せず
 線を引く右と左に君と僕
 親バカは兄の引く線に目を細め
 国鉄の路線に埋めてある赤字
 一筆書きの線が見事に生きている
 線引けばみんなが向う側にいる
 川柳わかやま
 堀端
 三男報

頂留子
 芙佐女
 好子
 智子
 恒子
 千里
 あいき
 いく子
 君子
 智恵子
 田鶴子
 公子
 きみ
 和子
 紀久子
 裕美
 佐代子
 雅代
 三男
 武太
 白光子
 登志代
 忠雄
 千寿子
 紀美女
 すみ子
 凡九郎
 雀踊子

葵水与史偲へば樽が重すぎる
 亡父偲ふ臉に高い肩車
 命日が近ずき色増す偲び草
 西宮北口川柳会
 杉浦婦美子報
 釣書に隆鼻術とは書いてない
 ライバルが逝つて父の替しめりがち
 半分はこぼれる孫の握り箸
 物思い箸に心を見抜かれる
 ご機嫌で帰りの鼻つまむ父
 安来節器用な所作で手癖かむ
 ライバルが隣りに坐り固くなる
 魚屋の二軒並んで大はやり
 ひたすらに愛のモチーフ編んでいる
 逝く秋や時効の傷を温める
 福耳のどこで狂つたか寡婦となる
 秋ざくら風もやさしくなでてゆく
 障子張る去年も同じ棧のきす
 花の恋落葉と共に散るさだめ
 見る方はとても面白い綱渡り
 老いの家人買い船ももう来ない
 コーヒーが戦開開始告げにくる
 水洩をすすると舞台冬になる
 観光に来てて農夫は土を見る
 七人の敵にアルファの妻があり
 城北川柳会
 川口
 弘生報

緑棲
 武雄
 弘生
 婦美子
 宏子
 笑女
 千子
 紫香
 メ女
 半歩
 文子
 美智子
 千世子
 冬枝
 静枝
 みつ子
 いわゑ
 道子
 右近
 天樹
 弘生
 俊子
 多久志
 弘生報
 三十四
 ふみ
 右近
 忠夫

赤まむし飲んでも効かぬ年となり
 雲一片あつても日本晴ときめ
 ふるさとの木枯しを聞く母のふみ
 スキ鍋ときまつた顔の市場竜
 優しさが曲者ウィングラス燃え
 平凡が幸せと知る年の暮
 寺参り三人三様の願いごと
 減入日は観音さまへ香を焚く
 個性ある顔で美人に見えてくる
 落葉焚く時効の傷を温める
 キザなセリフ聞いて沈んだ角砂糖
 求人欄ちびり犬車噛み合わず
 買ひもせぬのに気にかかる相場欄
 新酒酌む明治女は盛んなり
 楽をさす楽をさすよと嘘になり
 ゆずられた席降りるまで気が重い
 川柳後集
 井上柳五郎報
 臍くりがあらはれてる大掃除
 大掃除まだよう捨てぬ明治者
 大掃除これもあれもと老母捨てず
 大掃除一年間の垢をとり
 小さい大きな輪になる助け合い
 小さくともわが家明るい灯がともり
 言い訳の小さな声を聞き違え
 ただ酒が心を脱線さす汚職
 競合の事故と脱線葬られ
 脱線をしても若さ許される
 脱線をさせない糸を妻たぐり
 お歳暮が毎年ふえる登り坂

午郎
 捷一
 満津子
 ひろ子
 美恵
 達一郎
 道子
 はつ絵
 圭介
 千世子
 婦美子
 公一
 倫子
 晴子
 新一郎
 テルミ
 番茶
 恒洋
 柳五郎
 隆
 玉水
 秋月
 幽谷
 和夫
 哲郎
 照路
 久米雄
 定平

お歳暮へ義理も一緒に包み込み
一物を秘めて歳暮がまた届き

川柳高知

松風報

博友
宏太

健度司

日溜りて寒い世相を聞くばかり
横つ面ぶつてやりたい黙秘権

ライバルの知らない顔を別に持ち
箸箱を鳴らして職場の昼にする

待つことの切なさ知らぬ男の背
枯野行く車椅子にも詩があり

傑作の花咲かせても散る運命
ホステスも素顔で並ぶ参観日

晩酌を今日も素顔で注いでくれ
も一人の私が素顔から化ける

只酒を飲むと背中が寒くなる
臥しているところに音が聞え過ぎ

本当の素顔鏡は知っている
菜の花句会

色即是空その真ん中にある自由
豆を煮る豆殻にある七歩の詩

自惚れに看板娘嫁さおくれ
キーキだけ買っ心ブラのクリスマス

自由放任自転車置場で縛られる
内職の針が動かぬ糸の切れ

自由がほしい女でせつせと稼いでる
サラ金の看板読まぬことにする

御自由に妻がなかなかしゃれたこと
えのぐまだ濡れたまんまで見せに来る

芽の出来ない豆を死ぬまで撒きつつけ
鬼遊報

松風報

節子

松風

里

柳子

天吉

三吉

竹萌

弘生

登舟

冬木

秀子

広風

菊野

つきお

弥生

茂雄

みつる

与呂志

蕉露

醉々

釘にでも曲る自由は持っている
阪堺線刃物の町へまっしぐら

鰯だけを動かしている河豚の顔
置き手紙あなた自由にして上げる

赤ん坊が目覚めて家中動き出し
フリーセックスあまりに歳をとりすぎた

豆御飯自慢話がひとくきり
相場師が地獄極楽見た小豆

複数になると自由が侵される
ボナス日家族で囲む美々卯鍋

妻の目の中では自由に動けない
伊勢まいり誘う上六駅のピラ

片意地の男に雲が動かない
夫逝きて金はないけど自由あり

鳩を描くえのぐは平和の彩がよい
駒つなぎ川柳会

口下手の妻の愛想がゆき届き
口下手をおきながらやる聞き上手

風向きを変えなみやげの彩をよる
孫からの電話へ風向き変る父

風下に住みすぎ焼がよく匂い
順風になると拌んだのを忘れ

風向きにあられてる課長の哀れとも
風向きが変わり一諸に叱られる

風向きがどう変わるうと受けて立つ
風向きへ母を庇っている歩幅

風下へ猫ゆっくりと難を避け
風向きを察して二階降りて来ず

本能で風の向き知る蜘蛛の糸
小路報

規不風

鎮彦

美代

柳宏子

鬼遊

恭太

雅風

綾珠

善紫

雀踊子

弘生

小路

醉々

柳子

射月芳

凡九郎

道子

雀踊子

頂留子

悦郎

昭子

醉々

柳子

規不風

鎮彦

美代

柳宏子

鬼遊

恭太

雅風

綾珠

善紫

雀踊子

弘生

小路

醉々

柳子

射月芳

凡九郎

道子

雀踊子

頂留子

悦郎

昭子

醉々

柳子

規不風

鎮彦

美代

柳宏子

鬼遊

恭太

雅風

綾珠

善紫

雀踊子

弘生

小路

醉々

柳子

射月芳

凡九郎

道子

雀踊子

頂留子

悦郎

昭子

醉々

柳子

規不風

鎮彦

美代

柳宏子

鬼遊

恭太

雅風

綾珠

善紫

雀踊子

弘生

小路

醉々

柳子

射月芳

凡九郎

道子

雀踊子

頂留子

悦郎

昭子

醉々

柳子

規不風

鎮彦

美代

柳宏子

鬼遊

恭太

雅風

綾珠

善紫

雀踊子

弘生

小路

醉々

柳子

射月芳

凡九郎

道子

雀踊子

頂留子

悦郎

昭子

醉々

柳子

規不風

鎮彦

美代

柳宏子

鬼遊

恭太

雅風



裏道を知つてゐるらしい人生觀

一瞬の沈黙があり大拍手

沈黙の中で耳鳴り聞いている

沈黙は金と世間をずるく生き

沈黙は雨降る夜の水子塚

沈黙のあとの答えを期待する

沈黙をやぶるきつかけ待つ二人

好意もつてるから沈黙守つとく

戒めを正しく踏んで馬鹿になる

先代の遺訓が贅沢戒める

一匹の虫の軽さにある生命

あれ何の虫かと議論も山を越し

川柳ささやま

河原みの報

脱線の母を慕いて石を蹴る

脱線へ子供が諭す父の酒

脱線のつけを婦人科へ頼み

農民の青刈り脱線したくなり

平凡な願いに光る流し台

平凡が昼のドラマへ欠伸する

平凡な町を二つに割る選挙

平凡な暮らし財布も一つきり

花婿がとうとう負けた紋はかま

うれしさは泥大島と見たてられ

貸衣装着ている間は私のもの

満ち足りた晴着に蝶が舞うてくれ

割引いて聞いても奥歯浮いてくる

割引で聞いてやりたうい事もあり

得をした気持をささう五割引

わかあゆ川柳会

小砂

白汀報

美子

度

かずを

文秋

酔々

三十四

頂留子

弘生

悦郎

右近

鎮彦

弥山人

靖子

房子

文平

久子

つや子

百合子

ゆきお

可住

みのる

ひか平

春峰

越山

ゆうや

和人

和子

彼岸花去年のところに顔を出し

亡き母を悼んで墓地の彼岸花

蝶背負いのんびり歩く田舎道

道端の花は踏まれて強く生き

黄昏れてコンと鳴きそうキツネ花

土手原にあれば飛び火が彼岸花

曼珠沙華明日のことは考えず

後戻り出来ぬがままの日は落ちる

赤々と千手観音彼岸花

彼岸花ひとり芝居の日は落ちる

曼珠沙華す枯れる野道に染めかえる

墨の道慕いつづけて道はなるか

裏道を歩いて涙もろくなり

虹川柳倶楽部

新潟回天子報

渋滞車どうにもならぬ気のあせり

宝くじ買ったが運がついて来ず

法廷を無口な人がふるえさせ

齢老えは物扱いにされる娑婆

国鉄を赤字にさせた自家用車

一盗を出来心では済ませられぬ

生傷の絶えぬ子が居て幸とする

愛すれば罌を掛けなくなる季節

落葉しきり庭石の肌にもす叫ぶ

七十になって手相が気にかかり

小さい芽みなそれぞれに春を待ち

川柳塔まつえ

恒松

出稼ぎが近い男の冬田打ち

予想では近い景気待惚け

クルミの実カチカチ停年近いのだ

敏明

秀穂

タケノ

ふみ

歳栄

恒星

鈴江

輝水

はるみ

芳枝

美栄

清泉

白汀

実

勝一

四郎

義美

久仁於

正敏

一竿

素石

掬治

虹汀

回天子

叮紅報

耕草

鳳人

新雪

食料店近く手を抜く台所

核の脅威身近に感じ日本人

せり上げる五本の指へ鱈は飛ぶ

ささくれて暮らしがわかる妻の指

まっすぐな心のままに動く指

しなやかな指でまどわす夜の蝶

節くれの指が支えている生活

始末書の拇印に指が苦笑する

今日よりはあしたが恐い足の音

音のする方を見ていてたまさける

原点にかえり水車の音ひびく

雑踏が師走の音をもつて来る

ドア締める音で答えた反抗期

雪になる風くらがり音をゆする音

不器用も器用も同じ指の数

弁当の重さ子が又一人増え

弁当を持てば雑兵らしき影

弁当の中味気にする幼稚園

宍道湖の景駅弁の箸止める

無条件何やら不気味な予感する

蒸発が条件つきで戻つて来

条件も入れて雇傭の灯がともり

川柳塔柳箋

一冊 二百円

送料 二百四十円

愚童

巡歩

正朗

みのる

雪美

由郎

通児

鉄花人

栄

三和

みどり

尋美子

与根一

早苗

芳子

紫吻

孤呂二

孝

舞吉

鶴丸

登美也

叮紅

本社二月句会

日時 二月八日(月) 午後六時
会場 金属会館

南区鰻谷東之町10番地
地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
電話 271・3935番

兼題
「おはなし」
「暗示」
「結ぶ」
「指名」
「驥」
西尾 那須 児島 西田 柳宏子 菜選
高杉 鬼遊 須鎮彦 与呂志 選
各題三句以内厳守

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

3月の兼題 「溜息」「節交」「句際」「芽」

本社3月句会は8日(月)

お願い

誌代その他のご送金は必ず左記・会計室へお願い致します。(現金書留または郵便振替をご利用下さい)
なお広告原稿、有料投句箋等を同封の場合も会計室へお送り願います。

会計室

〒581 八尾市中田二一三〇二

高杉 鬼遊 方
振替口座 大阪三三三六八番

募集

四月号発表 (2月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 菜選
水煙抄(10句)正本 水客選
愛染帖(3句)橘高 薫風選
課題吟(各題5句以内)

「本番」 原田 明春選
「注射」 安藤 寿美子選
「玉」 飯田 悦郎選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

五月号発表 (3月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 菜選
水煙抄(10句)正本 水客選
愛染帖(3句)橘高 薫風選
課題吟(各題5句以内)

「微風」 柿原 秀子選
「罪」 桑原 道夫選
「土」 高田 博泉選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をこ使用ください。

2月の常任理事会は1日(月)

定価 五百円(送料45円)

半年分 三千二百円(送料共)

一年分 六千三百円(送料共)

昭和五十七年一月二十五日印刷
昭和五十七年二月一日発行

編集兼 中島 蓬太郎
発行人 藤原 童心社

印刷所 藤原 童心社

〒545 大阪市阿倍野区三軒町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(二六六九)一六九一四番
振替口座大阪・三三三六八番

編集後記

☆一月六日「水」事務所へ
初出。生々庵主幹から電話
あり。十五日のおめでとう
会のスケジュールについて
である。主幹のご回復の様
子が目に見えるようだ。
☆十二月の常任理事会で最
終決定した四月四日の改題
二百号記念大会のプログラ
ムに、主幹の挨拶の項が抜
けていた。常任理事会で、
これを忘れると大変だと書

肉体疲労時のVB₁₂補給に—— アリナミンA

アリナミンA25の効能—肉体疲労時・病中病後・妊娠授
乳期のビタミンB₁₂補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・
肩こりの緩和、脚気、会説明書をよく読んで
正しくお使いください。☆くわしくは医師、
薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。
武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27



き入れたのが実際には消えてしまっている。そのお詫びを言う。ともあれ、こしはばくは大会を目指して各自の力を結集することとなる。ご支援の程を。
☆白岩文衛さんの句集「出会い」に掲載の随想で昨年の仕事をしめくくり、構想の「大正・昭和の川柳人不二田一三夫」の執筆を初仕事にした。
☆風邪にご用心を。(薫)
☆灯台の夕陽神話を抱きよせる。この尼緑之助氏の作品が路郎賞に輝いたのが46年度のことであり、はやくも10年の歳月が流れた。
この作品が発表されたとき、筆者が感じたのは、一抹の哀愁が漂っていることであつた。別に夕陽だからということではなしにである。長い間、この哀愁感の誤が納得できなかった。
ところが、梅原猛著作集「神々の流泉(るさん)」を読み終えた時点で、筆者なりに、この理由が氷解したように思えた。

この哀愁感、出雲族の末裔に違いない出雲地方に棲みながら人々に流れる先祖からの血のきずなどではないかということである。この本の内容をここで語るスペースはないが、お読みになれば、筆者が氷解したという理由がお分りいただけると思う。(酔)
「深刻な時はどユーモアが必要だ。私たちが苦しいなをやってこれた支えはユーモアと笑いだつた」これは「連帯」のワレサ氏の言葉だと「天声人語」にあった。最近の川柳にユーモアのすくないのは、深刻さが不足しているからとも思われる。ボーランドと違い日本は物質に溢れている。大変結構なことであるが、それでいいことであるが、それだけで、はたして幸せと云えるのだろうか。政治家や官僚、教授たちが私利私欲のために、裁判沙汰になる事件を起しているのになにかあきらめムードで、時には正義感も白い目で見られる時代にあつてこそ、真

実を見る眼を養いたい。そこにこそ川柳の存在価値があるのではなからうか。
(き)
★この号から大萬川柳の頁が消えた。第三百六十六回の「最終」をもって三十年にわたる歴史に終止符を打ったわけである。川村好郎先生が羽曳野病院以来、手塩にかけて育てられた「どんぐり川柳会」も昨年六月事実上、解散しており、門下生の一人として誠に淋しい。
(史)



ご進物に重宝な 近鉄の商品券

★500円から50,000円まで各種ございます

先様にお望みの品をお選びいただける
手軽で便利なお贈答品です。ご進物には
近鉄の商品券をどうぞ

近鉄百貨店

アベノ店 06/624-1111 | 上本町店 06/779-1231 | 奈良店 07/42-33-1111

昭和四十七年一月九日 第 一 種 郵便 物 認 可
昭和五十七年二月十五日 印刷
昭和五十七年二月一日発行 (毎月一日発行)

オーエスケージェフ

熱い心を満たす

装うのはいいものだ、

思いのままに

気どったカッコウはきらいだ、

OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社 オ-エスケ-



あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



ぶたまん やきぎょうざ
豚饅・焼餃子
しゅうまい ちゃんぽん
焼売・叉焼饅

大 阪 ・ な ん ば



TEL (64) 0551

《支店・出張店》

なんば高島屋 心斎橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋
中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドーゾマ地下支店
ミナミ地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店 近鉄百貨店(アベノ店・上本町店・奈良店・東大阪店)